

大学教育開発研究シリーズ
NO.17 ● Feb. 2013

学びが高まる学習環境とは —ハード、ソフト、コミュニティー—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

学びが高まる学習環境とは —ハード、ソフト、コミュニティ—

立教大学

大学教育開発・支援センター

はじめに

このブックレットは2012年10月24日に行われた大学教育開発・支援センター主催のシンポジウム「学びが高まる学習環境とは—ハード、ソフト、コミュニティ—」の記録です。学内外からの参加者数は83名に上り、このシンポジウムの中心テーマである学習支援に対する関心の高さを示すものでした。

シンポジウムではまず公立はこだて未来大学教授の美馬のゆり氏に「これからの大学の学習環境デザイン—学習支援のあり方を中心に—」と題した基調講演をしていただきました。学習支援は多様な入試の広がりを契機として補習教育、導入教育の形で始められることが多かったのですが、大学のユニバーサル化が進行する中、全学生を対象とした学習支援室、ライティングセンター、ラーニングセンターという形に移行してきています。しかし、学習支援室などのハードを作っただけでは十分な効果が得られないことは多くの教職員が感じておられるところではないでしょうか。今後キーになる考え方として美馬教授が挙げられたのは学習方略の支援という点でした。これは学ぶ、記憶する、読む、書くということをどのようにやっていくべきか、を学生に知ってもらって自分の学び方を意識するという点であり、学生が効率的かつ効果的に学習者になることを支援するものです。

続いて行われた事例報告では明治大学の山田朗教授に「明治大学における学習支援室の取り組み」を報告いただきました。山田教授は、学生が躓きやすい科目、サポートが必要な科目を調査し、それに対応した学習支援の時間割を組んでTAを配置することにより効果が上がったことを指摘されました。これは教員が実態をきちんと把握し問題を共有化して、効率的で効果的な学習支援活動を組織的に行うことが一つの解決策であることを示しています。

学習の支援では、なかなか来ない学生に足を向けさせること、施設やスタッフ、サービスをより使ってもらうことも重要です。学習支援室は入りやすいことが大事であるので、図書館の中に学習支援室を置くことを山田教授が提起されました。村上和夫観光学部長と新座キャンパス事務部の田村未央子氏による事例報告「立教大学新座キャンパスの学習環境整備—プロセスと実践—」で紹介された新座キャンパスのフロア分けや、美馬教授が紹介されたはこだて未来大学のオープンスペースを利用した学習支援環境はこの方向性を持ったものでしょう。図書館司

書等のスタッフとも協力して部署を超えた連携をすることにより、人的リソースを有効活用し、柔軟、シームレスで持続可能な環境が統合できると考えられます。学習支援スタッフの増強も必要ですが、それには様々な方法が可能であることを米国の事例を通して美馬教授が紹介されています。

学習支援室の利用者は圧倒的に低学年次が多いと山田教授は分析しています。3、4年生においてはゼミ単位で先輩と後輩の学習支援関係ができるためと考えられますが、これは一つの学習文化であって美馬教授の指摘された学習の共同性と社会性の現れでしょう。学習の共同性を制度として取り込んでいくために有効な手法として、美馬教授はプロジェクト学習、チーム・ティーチング等を指摘されています。教員コミュニティの意識を変えていくこと、例えば、他の先生の授業を見に行くことなどによって教え方を工夫しなければならないことを自覚する、なども重要でしょう。学生に対して何らかのインセンティブを与えることにより非常に活発に動くようになった例も山田教授が報告しています。ディスカッションでは、ティーチングアシスタント、ラーニングアドバイザーのコミュニティを作り出すことや、更には仕組み作りの意志決定に学生を参加させるべきでは、という意見もありました。このようなコミュニティの熟成によって、先生が変わり、職員も変わり、学生も変わらなければならない、ということがこのシンポジウムの到達点であったように思います。

最後に、今回のシンポジウムの開催にあたりましてご登壇いただきました美馬のゆり先生、村上和夫先生、田村未央子さん、山田朗先生には厚く御礼申し上げます。また、シンポジウムの企画運営から報告書作成までご尽力いただきました谷村英洋さん、谷田川ルミさんをはじめとする当センターのスタッフのみなさん、熱心に討議していただいた参加者の皆様方に感謝申し上げます。

大学教育開発・支援センター センター員、理学部長

家城 和夫

はじめに	
プログラム	9
開会挨拶 家城 和夫 氏	11

第1部：講演

これからの大学の学習環境デザイン	
—学習支援のあり方を中心に—	17
	美馬 のゆり 氏
はじめに	17
1.近世の寺子屋から現代の学校へ	18
2.境界のあいまいさがコミュニケーションを促す	19
3.公立はこだて未来大学のデザイン	20
1) 学習の共同性と社会性を重視したオール・イン・ワンの大学	
2) 制度のデザイン	
3) 空間のデザイン	
4.新たな学習支援組織の必要性に直面	24
5.先行事例として米国の大学を調査	25
1) 米国における学習支援組織の系譜	
2) テキサスA&M大学	
3) タラハッシー・コミュニティカレッジ	
4) デイトナ大学	
6.ラーニングセンターを中心とした学習支援の組織化	32
7.学習理論と協働に基づく進化的デザイン—持続可能な学習環境のために	33
質疑応答	34
【配布資料①】	38

第2部：事例報告

立教大学新座キャンパスの学習環境整備

—プロセスと実践— 51

村上 和夫 氏・田村 未央子 氏

1. 学生は何を求めているのか —ラーニング commons の必要性	52
2. 教職協働と部署間連携にもとづく計画プロセス	56
3. しおり（新座図書館ラーニング commons）の概要	58
4. 利用状況と学生の変化	59
5. 学生の声と新座キャンパスの利点を生かして一層の整備を	60
6. 新座キャンパスにおけるオーバーフロー学生への対応策	61
7. ラーニング commons と授業の積極的接続	62
8. ラーニング commons で提供すべきサービス	62
【配布資料②】	64
【配布資料③】	66

明治大学における学習支援室の取組み 73

山田 朗 氏

1. 明治大学のキャンパスと学部	73
2. 明治大学における主な学習支援活動	74
3. 学習支援室設置の背景 —理系キャンパスから出発し文系キャンパスへも波及	75
4. 活動内容・運営体制	77
1) 職員・大学院生TA等が常駐	
2) 理系では学科ごと、またはつまずきやすい科目ごとに支援	
3) 文系では必要かつ可能な科目ごとに支援	
5. 利用状況	79
1) コンスタントな利用がある理系	
2) 利用率が高くない文系 —ロケーションの重要性	
3) 利用は低学年次で多い	
6. 成果と課題	81
【配布資料④】	84

質疑応答・ディスカッション 95

閉会挨拶 小澤 康裕 氏 106

学びが高まる学習環境とは

—ハード、ソフト、コミュニティ—

2012年10月24日（水）開催

シンポジウムの記録

プログラム

学びが高まる学習環境とは

—ハード、ソフト、コミュニティ—

開会挨拶 家城 和夫 氏 (大学教育開発・支援センター センター員、理学部長)

第1部：講演

これからの大学の学習環境デザイン

—学習支援のあり方を中心に—

美馬 のゆり 氏

(公立はこだて未来大学システム情報科学部教授)

第2部：事例報告

立教大学新座キャンパスの学習環境整備

—プロセスと実践—

村上 和夫 氏 (観光学部長)

田村 未央子 氏 (新座キャンパス事務部教務課職員)

明治大学における学習支援室の取組み

山田 朗 氏

(明治大学文学部教授、副教務部長、学習支援推進委員会副委員長)

質疑応答・ディスカッション

閉会挨拶 小澤 康裕 氏 (大学教育開発・支援センター 副センター長、経済学部准教授)

司 会 家城 和夫 氏

日 時 2012年10月24日 (水) 18:20～20:30

場 所 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

学びが高まる学習環境とは —ハード、ソフト、コミュニティー—

司会
大学教育開発・支援センター センター員、理学部長
家城 和夫 氏



Ⅰ開会挨拶

○家城 皆さん、こんばんは。本日は立教大学大学教育・開発支援センター主催のシンポジウム「学びが高まる学習環境とは—ハード、ソフト、コミュニティー—」にご来場いただきまして、ありがとうございます。私は当センターのセンター員をしております家城と申します。本日の司会を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

さて、今日は多数の方にご来場いただいておりますけれども、ほとんどの方が、いろいろな形で大学の教育に携わっている、あるいは、教育を受けていらっしゃる方々かと思えます。皆さん、ほとんどの方はもう既によくご存じだと思いますけれども、8月終わりに中教審の答申が出ております。この答申は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」というタイトルでございますけれども、大学教育をどう変革改善すべきかという提言になっております。

この中で言われていることは、最近の少子高齢化、あるいはグローバル化の中で大学教育を質的に転換しなければいけないということです。成熟社会の中で大学教育をどう変えるべきかということなのですけれども、そこでは、学生が主体的に学ぶということが強調されています。そのこと自体は、これまでいろいろなところで言われてきたことでありますし、アクティブ・ラーニングに関するシンポジウムも数多く開かれてきております。

ただ、個々の教員の取組みによって、そういう主体的な学習をさせるということとは今までいろいろと言われてきたのですが、今回の答申を読みますと、それだ

けではだめなのではないかと書かれています。そして、どういうふうにして転換をするべきかという点で、幾つかの提言がなされています。

1つは、プログラムとしての学士課程教育ということで、既に各大学で整えられているディプロマ・ポリシーを達成するために、数年間のプログラムとして大学教育を設計し提供するという事です。そしてそれと同時に、ディプロマ・ポリシーを達成するためには、学習支援の環境を整えなさいということが幾つか述べられています。今日のシンポジウムは、その学習支援環境をどうするべきかというところに焦点を置いたものでございます。2部構成になっておりますけれども、前半のところではこれからの大学の学習環境デザイン、特に学習支援のあり方を中心にとということで、公立はこだて未来大学の教授でいらっしゃる美馬のゆり先生にご講演をいただきます。第2部では事例報告を予定しております。

はこだて未来大学というのは、いかにも夢のある名前なのでございますけれども、後で美馬先生から詳しくご紹介があると思いますが、この大学は比較的新しい大学で、2000年開学と聞いております。そういうことで、非常に斬新な試みをなされておりました、そのことはこれまでにいろいろなところでご紹介されて

おります。学習環境や大学生の学びというものをどういうふうにデザインするかという観点から、非常にいろいろな試みをなさっていると聞いております。

ご講演いただく美馬先生は、ご専門が学習科学、あるいは認知科学というところから始まって、サイエンス・コミュニケーションあたりまで広がっていらっしゃるのですが、実はこのはこだて未来大学には開学のご準備のところから関わっていらっしゃいます。また、いろいろな大学の環境のデザインというものに関わっていらっしゃって非常に深い経験をお持ちですので、その辺のこと



ですとか、あるいは、アメリカでの事例にもお詳しいと伺っておりますので、その辺りのお話をさせていただけるものと考えております。

美馬先生は現在、公立はこだて未来大学システム情報科学部の教授でいらっしゃいます。また、お台場に日本科学未来館というのがございますけれども、こちらの開館に際しましても監修を担当されまして、2003年からは3年間ほど副館長を務められたとお聞きしております。その点からいろいろなアイデアに関してお話いただけるのかなと期待しております。

では、美馬先生、よろしくお願いいたします。



第 1 部

[講演]

これからの大学の 学習環境デザイン

—学習支援のあり方を中心に—

公立はこだて未来大学システム情報科学部教授
美馬 のゆり 氏

はじめに

どうも、こんばんは。美馬でございます。今日は、「これからの大学の学習環境デザイン—学習支援のあり方を中心に—」というタイトルでお話をさせていただきたいと思います。

大学の学習環境については、皆さまのご関心がかなり高いとお聞きしましたので、最後のほうはかなり文字の多いスライドなのですが、皆さまにぜひお持ち帰りいただいて、今後のご参考にしていただければと思います。

まず、今ご紹介いただきましたように、私の研究領域は、今まで1つの言葉で表すものがなかったのですね。大学の学部時代はコンピューター・サイエンスを学びました。その後、それを教育にどう使うか、そして、教育に使うにあたって人間がどのように学ぶかということに関心が向いてきました。そのため、情報工学、教育学、認知心理学のだいたい中間のところをやっていると皆さんにはお話ししてまいりました。ただ、この10年ほど前から、学習科学、ラーニング・サイエンスという分野ができあがってきました。まさにこれが、私が関心を持ってやってきたことだなと考え、このごろ「専門は」と聞かれたときには、学習科学ということにしています。

その学習科学、まだあまりなじみがないと思われましたので、ここに定義を書きました【スライド①-2】。人がいかに学ぶかについての理解に基づいて、人の学習過程を支援するための科学である。また、現代のテクノロジーを駆使して実効性のある教育システムを教育実践の中でつくりあげようとするもの。まさにこれ

が学習環境デザインということにもつながってくるわけです。

1. 近世の寺子屋から現代の学校へ

実は、今日お話を始めるのは、こういった新しいところからではありません。まずこの絵をご覧ください^[1]。これは渡辺崋山が文政元年、1818年に寺子屋の風景を描いたものです。ここに先生らしき人がいますね。子どもたちがそのまわりにおいて、こちらのほうでは何かものを読んでいるし、こちらのほうではお習字。この辺はどうも悪ふざけをしていたり、一人で何かをやっていたりする子どもたちが見えます。この当時は、女子と男子は別々でしたので、これは女子向けの寺子屋ですね。ここにも先生がいて、まわりに子どもたちがいて、ここに今で言うティーチングアシスタントでしょうか。ねえやみたいなたちがいて、この辺はお人形を出して遊んでいる子もいるし、お習字をしている子もいるし。

こちらは、すごくまじめなように見えますけれども、武士が武家のお屋敷で一般の庶民に対して開放している寺子屋で、ここでも大先生のほかにアシスタントの人がいます。

これらを見ていると、この武家のところでやっているのはちょっと別にしても、みんな楽しそうですね。それとこれはもう1つ、この当時あった成果発表会のようなものですね。席書会^{せきしょかい}と呼ばれるもので、半年に一度あったと言われていました。この席書会の日には、寺子屋に来て、まず一番左にある神棚にお参りをし、普段の自分の練習の成果としてお習字を書いてみんなで上に張り出して、ああでもない、こうでもないと言って、お茶を飲みながら、お菓子を食べながら楽しんで、みんなで自分たちの成果を見合ったそうです。これもすごくみんな楽しそうにやっていますよね。

この当時の寺子屋というのは、庶民の子どもを対象とした初等教育機関で、現在の小学校の倍の数が存在したと言われていています【スライド①-3】。基本は自学自習。個人に合わせたカリキュラムで、実際には読み書きそろばんで、商人の子どもには、そろばんが中心であったり、文章、本を読みたいといった子たちには、字を読むリテラシーをつけるというようなこともしました。いろいろな活動があ

[1] 江戸時代の寺子屋の絵が複数紹介された。

るわけです。同室にいながらも異なる課題にいそしんでいますし、同じ部屋で学んでいますから、それぞれの子どもに対する教師の指導がそれとなく聞こえてくる。たいていは教師の自宅でするので、生活も見え隠れしているというような特徴があります。

これが、江戸時代から現代へと時代を経るにつれて、変化していきます。これは昭和の初期ですね。1930年代になると、学校という形になってきます^[2]。次に、私が小学校へ行っていた頃、かな。皆さんはどうでしょうか。昭和中期、1960年代の小学校。それから、これが現代の大学の講義風景です。寺子屋であんなに子どもたちが楽しそうに、それも自発的に学びにきていたのに、それが時代を経るにつれて、このようになっていく。

2. 境界のあいまいさがコミュニケーションを促す

江戸時代はあんなに楽しそうだったのに、なぜ今こういう形なのでしょう。江戸時代の名残というのは、今、私たちの生活の中でどんなものがあるのかというと、例えば、この長屋とか、軒先とか、縁側、路地裏、井戸端を上げることができます^[3]。例えば、この長屋や路地裏のところ、いろいろな人々の会話が生まれるとか、出会いが生まれるとかということは、皆さんでも想像に難くないところだと思います。人がふと出てきて、そこからおしゃべりが始まる。

一度、こういった話を国際会議でしようとしたら、この軒先とか、縁側とか、長屋というのは英語にならないんですね。つまり、これは日本の文化に根ざした独特の、特有のものであるということです。こういったところで、人々の生活の中でコミュニケーションが起こってくる。

つまり、ここにあるのは何かと言えば、境界のあいまいさであると思います【スライド①-4】。内側と外側、単独と共同、形式的と非形式的、日常と学校。そこにあるのは、気配です。先達の日々の活動から見えてくる歴史や文化といったものがあるような気がします。

[2] 1930年代と1960年代の小学校、現代の大学、それぞれの授業風景が紹介された。いずれも教壇に教師が1人立ち、多くの児童・学生が全員そちらを向いて授業を聞いているという一斉授業の風景であった。

[3] これらの写真が紹介された。

さて、ここで、もう1つ写真を見てみます。お茶の間です^[4]。これも多分、今日いらしている方々であればご存知の風景かと思います。こういうところで、どういことが起こるのかということも想像できると思います。すごく懐かしい。これが典型的なお茶の間です。

この時代の住宅のスタイルというものに注目しますと、この和式のお茶の間が持っていた機能というのは、洋式の家におけるリビングであったり、ダイニングであったり、書斎であったり、寝室であったりするわけです。ちゃぶ台を片付けるだけでこういった機能をすべて持つことができます。つまり、このお茶の間というものが、一部屋でありながら多機能である。マルチ・ファンクションを持っている。ところが、洋式の建物は、もうリビングはリビング、ダイニングルームはダイニングルーム、書斎は書斎、ベッドルームはベッドルームということで、一部屋一機能ということで、私たちの生活は今そのようになってきています【スライド①-5】。

これを大学に置き換えてみますと、これは典型的なキャンパスですけれども、教室棟と研究棟、事務棟、図書館、食堂といったものに、1つのビルディングが1つのファンクションになって分かれている【スライド①-6】。さっき言った縁側、あるいは路地裏、あるいは軒下といった下町の長屋で起こるようなコミュニケーションがなかなか起こりにくいようなものになっているというわけです。

3. 公立はこだて未来大学のデザイン

1) 学習の共同性と社会性を重視したオール・イン・ワンの大学

これは私たちの大学の写真です。情報系の1学部単科大学ということもありますが、本学ではオール・イン・ワンとあって、すべての機能がここに入っています^[5]。これには理由があります。

ゼロから大学をデザインするという機会に恵まれました【スライド①-7】。

[4] お茶の間の写真が紹介された。

[5] 公立はこだて未来大学のキャンパスのマップが紹介された。以下に続く講演のなかで、適宜同大の施設・設備等の写真が紹介された。同大の施設・設備等については、美馬のゆり・山内祐平著『「未来の学び」をデザインする』（東京大学出版会）や、同大のウェブサイトですく紹介されているのでそちらを参照してください。

2000年4月に開学し、設置母体は函館圏公立大学広域連合という1市4町、今は市町村合併が起こりまして、2市1町になっています。情報系の単科大学、システム情報科学部という1学部2学科で、各学科が1学年120名、博士課程前期・後期合わせて、今、1,200名の学生がいます。

1996年12月に、情報系の大学をつかってほしいという依頼が私のところに舞い込みました。この計画策定専門委員会というものに、当時、私を含めて7人の30代半ばの情報系の教員が集められました。その中で私たちがやってきたことは、ここに書いてありますように、「情報系」というのは決まっていたのですが、具体的に学部・学科をどういうものにするのか。教育理念の構築、カリキュラムの開発、同僚を確保するという。それから、建築家を選出して共同で校舎をデザインするという。それから、1万5千点におよぶ備品。「ごみ箱を含む」と書いてありますけれども、そういうものすべてを決めてきたというわけです。その中でどういう思想をもとにやってきたのかというのは、ここにありますが、東大出版会から出しました『「未来の学び」をデザインする—空間・活動・共同体』という本にまとめさせていただきました。

その際、根底に据えていたのは、学習の共同性と社会性というものです【スライド①-8】。学習環境へのアプローチとして、当時、我々が考えたことは、学習理論の中でも当時新しく起こってきた正統的周辺参加という考え方です。それは、



こういったものです。学習は、個人の単なる知識の獲得ではないということ。個人の集団への関わりが強まっていくプロセス。そのプロセスこそが学習であるという考え方です。

その中でも特に、学習の共同性ですね。二人以上の人間が協動的に活動することによって、理解が深まる、進化するという学習の特性です。もう一つは、学習の社会性。学習は社会的に意味のある活動の中で動機づけられるという、これも学習の特性です。

この2点をベースにして、どういう活動を大学の中で行っていくべきか。あるいは、そのためにどういった空間が必要なのかということを考えていきました。つまり、大きくまとめますと、制度のデザインと空間のデザインということになります。

2) 制度のデザイン

制度のデザインというのは、この4点に象徴されます【スライド①-9】。1つは、今ではPBLと言えば皆さんおわかりになるような、Project Based Learningの手法です。当時は、プロジェクト学習と言っても、誰もわかってくれませんでした。それをここでは、開学前の、文科省の設置審に出すときから、3年生全員の必修、それも1年間かけてやる。そして全教員がそれに関わる。ということで、これを2000年開学と同時に始めました。3年生の必修ですから、実際に始まったのは2002年ですね。3年生全員が1年かけて、教員も学生もチームで実社会の問題解決に取り組むという。これが単位として認められるというものです。

それから、チーム・ティーチングの採用です。これは、どの教員も必ず、1つの科目をチームで教えるというもので、開学当初から入っています。チーム・ティーチングというのは、同時に2人の教員が同じ教室にいるということだけではないんです。例えば、1年生、2年生の必修科目で、何クラスかに分かれてやる場合にも、質を同じにするということで、先生たちが必ず内容を同じにして、小テストなども同じにして、その途中でも何回も何回も話し合って授業を行うというものです。そういった形のものも含めてチームと私たちは呼んでいますが、そういうチーム・ティーチングを採用しました。

それから、学内の共同研究を奨励するという形で、学内共同のプロポーザル形式の研究費の制度もつくりました。

それから、オンライン授業フィードバックシステムというのを自分たちで作りしました。今は、これ、皆さんのところでもあると思うのですが、授業評価と言われるものですね。これは、本学では同じ仕様のノートパソコンを新入生のときに必ず購入することになっていますので、オンラインで入力できるようになっています。質問項目も、自分たちでつくったシステムですので、どんどん改良することができて、実際に授業の始まった前期の最初の頃とか、真ん中や終わりでも実施できます。学生に対して、「そのできなかったことはあなたに責任はありませんか」というような質問とか、「来年この授業を取る学生へのメッセージをお願いします」といったものまでいろいろ入っています。これはもう最初から全部自分たちでつくって、すべての科目に導入しています。これらが制度です。

3) 空間のデザイン

空間についてはこの4点です【スライド①-9】。全ガラス壁の教室。それから、異なる形式の教室。異なる教育スタイルを共有できるよう、プロジェクトができるような、グループ学習ができるような教室もあれば、一斉授業が可能な典型的な形の教室もあります。

またオープンスペースをいろいろなところに作りました。これも、多様な学習スタイルを保証するため、オープンスペースにもいろいろな形のオープンスペースがあります。

それから、公共施設の配置ということで、ライブラリーやミュージアムを大学の正面入り口に配して一般に公開しています。

学内全域のLANの設備と、必携のノート型パソコン。全教室にプロジェクター、全机に電源を設置し、知の共有と蓄積、コミュニケーションの促進を図るようにしました。現在、このようなことはどの大学でもほとんどできていることと思いますが、これを2000年4月に始めたということです。

我々のモットーはオープンスペース、オープンマインドです。これが典型的なうちの学内の風景です。ほとんどオープンスペースですね。丘陵地に建っているので、だんだん畑のような形で、階段下に教員の研究室が入っています。

これが、学生が自由に使えるスペースです。我々の教員研究室はその階段下に入っていて、必ず学生の前を通らないと出入りできないようになっていますし、ガラス張りなので、先生からも学生が見えるし、学生からも先生が見えるという

ような形です。もう少し近づくとかんな感じになっています。

我々はここを「スタジオ」と呼んでいます。ここは学生が自由に使えるだけではなくて、ここで授業も。これは私が同僚の先生とプロジェクト学習をやっているところで、このように授業の場にもなります。

これは年に何回が開かれている成果発表会です。さっきの席書会のようなものですね。このように使って、教員自身も学生集めのためのプレゼン合戦をしたり、学生もプレゼンをしたり、こういった風景が年に何度もあります。

多様なスタイルの教室ということに関していえば、当時あまりグループ学習用の机というのがなかったので、これはオーダーしてつくりました。一斉授業をする、こういった教室もあります。

4. 新たな学習支援組織の必要性に直面

このようにやってきて、我々なりに、教員 70 名みんなで知恵を出しながらいろいろやってきました。しかしながら、近年の入学者の学力低下は著しいものがあります。いくら私たちが理想だと思ってやってきた教育であっても、学生の質が変わってきているということは、はっきり私たちにわかります。

そういった中で、我々はまた考えました。つまり、新たな学習支援組織が必要だろうということです。それは大学の大量化から派生した問題をどう解決していくのかということです【スライド①-10】。日本では、今それをこの数年、初年次教育とか、リテラシー教育とか、キャリア教育とか、学士力とか言われ、皆さんいろいろご苦労なさっていることだと思います。

この日本における初年次教育で何をすべきかというのは、濱名篤さんの定義によれば、大学生活への対応、学習、対人関係など。大学での必要な学習技術の獲得。読み書き、批判的思考力、調査、時間管理ですね。当該大学への適応。自己分析、ライフプラン、キャリアづくりへの導入。学習目標、学習動機 の獲得。専門領域への導入。大学教育の中で、我々はこれだけいろいろな課題に直面しているのです。

まわりを見渡してみると、教育GPの指定校などは、こういった問題を解決しようと皆さん頑張っているらしいんですが、いろいろな問題に対して個別に対応するということが行われているような気がします。これらの課題に対して、何か

一発で解決というのはもちろんないと思います。しかし、この1つ1つに個別に対応していったら、それはもう大学の教員も職員もみんな、忙しさにつぶれてしまいます。

そこで我々は、これらに個別に対応するのではなくて、何か根幹に関わるようなものがないのか、ということを考えました。

5. 先行事例として米国の大学を調査

1) 米国における学習支援組織の系譜

そのときに、私が考えたのが、米国における学習支援ですね。米国では既に大学の大量化がもう何十年も前に済んでいると。その大学はどうしているのだろうということで、いろいろ調べ始めました。

米国の大学では、1965年に大学の進学率が50%を突破しました。そのときに起こってきたのが、ライティングセンターの設置という動きです【スライド①-11】。これは、読解、作文の支援を行う。授業外の、課外学習支援としてライティングセンターというのができはじめました。1990年になると、大学進学率が60%を突破します。このときにできあがってきたのがラーニングセンターと呼ばれるものです。特に理数系の科目ですね。日本で言うともう算数ぐらいに値するものだと思いますが。理数系の科目でどうしても支援が必要な学生が出てきているということで、理数系の科目。それからここで注目すべきは、学習方略の支援ということです。今後私はこれが日本でもキーになると考えています。つまり、Learning how to learn、学ぶ方法を学ぶということですね。

日本ではあまり行われていませんが、この学習方略の支援というところで、初年次用のテキストがアメリカでは版を重ねて、いろいろなものが数多く出ています。その中では、認知心理学等の分野における読み書き、記憶といった研究成果が応用されていて、学ぶ、あるいは記憶する、読む、書くということをどのようにやっていくべきかということが1年生向けの教科書としてまとめられています。

各教科、例えば数学を、あるいは読み書きをどうするというよりもっと前に、そもそも人間が考えるとか、学ぶとか、記憶するとか、理解するとか、それらがどういう性質を持っているのかということをもっと学生たちに知ってもら

のです。それを応用して、自分の学び方を意識化するということです。このような動き、組織が出てきました。それがラーニングセンターです。

一方で、新しいデジタル化の波、インターネットの波もあって、ラーニングcommonsという発想が図書館から出てきます。だいたい2005年ぐらいからですね。図書館との融合ということで、図書館という場所、そこにいる人材、それからそこにあるリソースですね。それらも融合した機能というのがラーニングcommonsとして出てきました。

2) テキサス A & M 大学

そこで、我々はラーニングセンターを調査してきました。ラーニングセンターというのがどういったものであるのか。実際どのような活動が行われているのか。その設置の歴史的背景や、センターの組織構成はどうなっているのか。学内のどのような位置づけでセンターが運営されているのか。そのカリキュラム、物理的環境、スタッフのスキルと人材育成、専門スタッフ、予算と評価、こういった様々なことについての調査です。

米国にはラーニングセンターが集まる学会があって、その中で毎年、賞を出しています。まず、その賞を受けた1校であるテキサスA&M大学に行ってきました^[6]。こちらのセンターは、スチューデント・ラーニングセンターといいます【ス



ライド①-12]。ミッションはどうなっているかという、特別に設定したコース、講義やプログラム、サービスを提供することによって学部学生の学業の継続、これは日本でも問題になっていますが、リテンションですね。中退防止と、学業における成功を促進することであるというミッションが立てられています。

そしてここが重要なのですが、学内の学習支援活動を組織化するというです。つまり、先ほどGPでいろいろ行われているといいましたが、そのGP以外でも、それぞれの大学、皆さんのところでもいろいろなところで学生の学習をなんとかしなければということで、組織毎、あるいは学部毎で学習支援を行っていると思います。ラーニングセンターというものをつくることによって、それらを組織化していこうというわけですね。

そこで、まずは学内で行われている様々な学習支援サービスを知ること。それから、個々の教員が行っていること、あるいは問題としてとらえることについて状況を把握する。つまり、「レポートが書けない、書けない」と言って先生方みんな困っているけれども、その問題を共有する。それらの解決策としてのプログラムを効率的で効果的な学習支援活動として実施するという。これらを実施するには関連する学内組織や教員との連携が鍵です。プログラム開始後も毎年、最新の学生の傾向を把握してプログラムを修正していくということ。それから、オンライン・チュータリングなど、ICTを利用する可能性について検討する必要もあるでしょう。それらを踏まえた上で、予算、人材配置、実施場所などのすり合わせを行っていくということでした。

このようにしてできてきた、テキサスA&Mの組織がこれです【**スライド①-13**】。センター長がいて、それぞれにプログラム長、コーディネーター。今日は詳しく説明しませんが、ネット上では詳しいレポートなども出ていますので、ご参考にしていただければよいと思います。

ポイントは何かというと、専門職の人ですね。ここでセンター長は教授も兼ねていて教員ですが、学生がやっているチューター以外、ここに書いてあるプログラム長や、その他の専門職の講師等は、教員ではないんです。しかし、一般事務職員でもなく、最低修士以上の教育学などの学位を持っている人たちが構成され

[6] 以下、米国の3つの大学の訪問調査で得られた成果に基づいて講演が続く。適宜、調査時に撮影した写真が紹介された。

ています。専門職としてこういう人たちを雇って、一緒に新しい学習環境を整えていくというのが、これからの日本の課題だと思います。

また、建物がなくてもできるということで、これは実際のチュータリングの風景です。チューターというのはきちんとトレーニングを受けた上でチューターとなります。チューターのトレーニングを受けているときにも給与は支払われます。チューターのトレーニング・プログラムは、学会で認証制度があって、ここのプログラムは、その認証をとった15回のチューター・プログラムです。それを修了した学生だけがチューターとなれます。プログラムのなかで教えられていることは、チューターとして、していいこと、してはいけないこと。あるいは、学習法略についての知識を学ぶ。自分たちで何か新しい試みするとそれは評価されます。年に一度のチューターによる発表会もあったりして、いろいろな仕掛けが組まれています。

このチューターについては、給与はマクドナルド並みです。ただし、なぜ彼らがそこにいるかということ、学外ではなく学内で仕事ができるということ。履歴書に書けます。つまり、このチューターたちは学士課程のあと、例えばロー・スクールに行ったり、メディカル・スクールに行ったりする。そのような学生が積極的にこのチューター・トレーニングプログラムを受けて、賞を取って卒業していきます。また特定の教員と親密な関係になれる。つまり、ある先生の授業のお手伝いをしたり、チューターをしたりするということで、自分自身がさらに深く学んでいく機会が得られるわけです。給与としてはマクドナルド並みでもかなりやりがいがあると学生たちは言っています。

チュータリング実施場所について、これはビルの玄関を入ったホールです。ホールのここ。本当に普通の場所に、こういうちょっとした椅子やベンチが置いてある、こういうところでやっています。実施しているということは、ホームページで「この辺りで、毎週何曜日に何時から何時まで」とお知らせします。これは夜です。6時から8時という形でここにいますと書かれています。チューターであることがわかるのは、このTシャツ。スチューデント・ラーニングセンターのTシャツを着ている人たちがチューターです。この人たちは、ここのチューターゾーンにいます。チュータリングと書いてありますね。こういうふうにホールのようなところでやっていますし、空き教室でやる場合もあります。

3) タラハッシー・コミュニティカレッジ

次にご紹介するのは、タラハッシー・コミュニティカレッジです【スライド①-14】。2008年にラーニングcommonsとして、学内の支援組織を一本化しました。学内に点在していた学習支援を、全学の学生対象にということで、図書館司書との協力関係を構築し、教員との連携を始めました。

学期の最初の5週間で9千人が利用しています。この組織はデータをかなりきっちりとっています。つまり、これは学内でのプレゼンスですね。予算を獲得するためには、どれぐらいの人が利用していて、このプログラムを取ったことによって、取っていない学生と比べてのどれだけ中退率が低くなっているか。先ほどのリテンションですね。こういったことを積極的に学内で示して、予算を獲得するということをしています。

このタラハッシーのコミュニティカレッジは1階が自然科学、2階が人文科学という区分けで、後で写真をお見せしますが、そのまま図書館へ移動可能です。たまたま何か建物が1つ空いて、それが図書館の隣だったので、図書館と廊下をつなげてこのラーニングcommonsにしたということでした。

ここでの運営の5原則は、インクルーシブ、全レベルを対象とする。インテグレート、重複したサービスをなくす。ここがポイントですね。いろいろな学習支援を増やしていったら、教職員みんな忙しさにつぶされてしまいますから、重複したサービスをなくす。それから、プロアクティビティー、既存のリソースを有効活用する。コラボレーション、スタッフ間で協力し合う。それから、レスポンスビリティ、責任をもって取り組む。これらが彼らの運営5原則になっています。

これが、ラーニングcommonsの大きい立派な建物です。もともとは資料館だったそうです。1階が、ここにあるように、マス・サイエンス、理数系と書いてあって、2階がコミュニケーションや人文系と書いてあって、階を分けています。

さて、この大学で特徴的なのは、教員やチューターが質問者が座っている机に出向くというシステムになっていることです。「出向く」ということですが、この写真のように、学生が自由にこの部屋に入ってきて着席して勉強します。机の上に、先端にボールが付いた棒のようなものがいくつか横になっていますね。これはペコッと立てることができます。質問があると、これを立てます。またこの先についているボールの色に意味があります。グリーンが数学で、これがコン

コンピューター関係。これがサイエンス。これはアカウントティング。これはビジネスです。ファイナンスなどの分野がこの大学の特色になっています。こういうものがあって、これをピットと立てると、立った色に応じて担当のチューターが出向く形になっています。

チューターゾーンを横に見ると、ここの奥がライブラリーになっていて、ライブラリーのものをこちらに自由に持ってきて見ることができます。リファレンスを使うこともできますし、入り口のところにすべてディテクターがあって、それから貸出機能もあるので、資料は持ち運び可能になっています。

4) デイトナ大学

もう一つ、フロリダ州のデイトナ大学ですが、アカデミック・サポートセンターという呼び名です【スライド①-15】。数学や語学など1年生の基本的な授業と教養の授業の教室が2階、3階で、1階がこのアカデミック・サポートセンターになっています。2階と3階で授業を受け、その講義で出た宿題はセンターでするということを習慣づけることをしています。そこにはラーニング・スペシャリストという人が常駐しています。さっき言ったような教育学の修士号以上を所持している専門職員です。

この大学では教員がここに来て学習支援を行います。アメリカの場合はオフィ



スアワーがはっきり決まっています。何時から何時の何時間は学生に対応してください。このデイトナ大学では、ここに来ている時間も、教員のオフィスアワーの一部としてカウントするというのを学内の制度として作りしました。つまり、教員はオフィスアワーの間、研究室にいて学生を待って個別に対応しなくても、こっちに来ると結構いっぺんに質問などに対応できるということがある。学生も来やすいし、教員側も質問を1対1で何人分もやらなくてもいいという感じがあるそうです。そして、ここでの時間がオフィスアワーに換算されるという仕組みです。

こちらはさっきのタラハッシーとは違い、質問者が、教員やチューターのところに出向く。タラハッシーでは、質問したい人のところに教員やチューターが出向くシステムでした。

ここの運営の三原則は柔軟性、シームレス、統合化。やはり学習支援を統合するという事なんです。

これがアカデミック・サポートセンターの写真です。この方たちがスタッフです。この人がラーニング・スペシャリストとして、学生たちが見えるところに座っています。こちらにずらっと学生が使える机があります。ラーニング・スペシャリストの彼は、もともと学生時代はチューターだったそうですが、それがもう楽しくてやめられなくて、大学院出た後、戻ってきて、ここでラーニング・スペシャリストをしている、という卒業生でした。

ラーニング・スペシャリストは、「今自分は仕事だからいつ聞きに来てもいいよ」というときは、そのことが分かるように、この“On duty”の目印を立てます。また教員も、“Faculty I'm here to help”という立て札を机の上に出す。立てておけば、もし誰も来なくても、オフィスアワーであっても、自分の仕事ができるというわけですね。

この引き出しには、学生の毎週の宿題が入っていて、ここで管理されています。つまり、2階、3階で受けた授業の小テスト、あるいは小課題というのが、ここにファイリングされていたり、ここで提出されたりしている。つまり、家に宿題は持って帰らない。ここで済ませて出て行くことを想定して、2階、3階が教室、1階がこのラーニングセンターになっているというわけです。

16. ラーニングセンターを中心とした学習支援の組織化

先ほど紹介した新しい学習理論とこれらラーニングセンターというのは、すごくなじみのよいものだと私は考えます【スライド①-16】。ラーニングセンターは、学生が効率的かつ効果的に学習者になることを支援するということですね。このようなセンターの力を使って、高校から大学生活へのスムーズな移行として3R、読み書きそろばんのみならず、学習技術や時間管理法を習得していく。さらにはそこでの活動は、キャンパス内の人的、物理的資源を活用するということを強調した課外教育になっている。ここに来ることによって、学生チューターや、卒業生であるラーニング・スペシャリスト、教員など、多様な人材と接触する機会がこれらのセンターにはあります。

結果として、こういうセンターがあることによって、退学率が減少したり、学生生活、社会生活のスキルが向上したり、大学というコミュニティへの参加が促されたりする。また学習者としての学生の自己認識や能力を強化することにつながる。そういったことが学習意欲や自信を向上させたり、学習に対する積極性が向上するというところに役立っているのではないかと思います。つまり、数学ができない、文章が書けないという個別の側面よりも、学習というものを全体としてとらえ、このような活動を組織していくということ、このようなコミュニティを大学の中につくっていくということです。

我が国における展開としても、ラーニングセンターを中心とした学習支援活動を組織化するという事に可能性があるだろうと思っています。というか、私はこのほかにあまり思いつきません。個別に対応していったら、本当にもうこれ以上無理だと、皆さんお感じになっていると思います。

そこで、未来大学はメタ学習ラボ、メタラーニングラボをつくりました【スライド①-17】。本学はオープンスペースが幾つもあり、いたるところにありますので、その一部をちょっと仕切って、学生を主体にしたチュータリングのシステムを今開発中です。チューター・トレーニングも今、カリキュラムをつくりながらやっています。つまり、先ほど言いました大学の大量化から派生した問題を、「学生が学生を教える」というピアチュータリングによって、またそこに教員、職員が関わっていくということによって、解決しようとしています。ここで授業時間外の学習を支援する。それも学習法略、私たちはメタ学習と呼んでいますが、それ

らを意識的に支援するということです。そこに学生、職員、教員がみんなで、それぞれの役割を持ちながら関わっていきます。

7. 学習理論と協働に基づく進化的デザイン — 持続可能な学習環境のために

こういった学習環境を運営していくためには、持続可能な環境が必要ですね。何か1つやって、あるいはGPを取って、それでおしまい。その3年間、あるいは5年間でおしまいというのではない、継続的にそこに参加する仕組み。教員も職員も関わって、何よりも学生が学び続けていくような環境を、いかにつくっていくかということで、最初に紹介させていただいた本の中に、デザイン原則というものを挙げました【スライド①-18】。空間をどうするか。そこでどういう活動を行っていくのか。そこでどういうコミュニティができあがっていくのか。そのときにどういうツール、メディアを、どういうふうに使っていくのか。デザインしていくのは誰なのか、といったことです。私の手法としては、とにかく教員と職員、あるいは学生が一体となってチームをつくっていくということ。その中で参加と協働が起こってくるということです。

根底に据えるのは、学習の共同性と社会性です。それを基軸にして、持続可能な学習環境をいかにデザインしていくかということだと思います。常に、デザインという言葉は1つつくっておしまいということではありません。このごろは、デザインというのは「もの」から「こと」へ、といわれています。「これがかっこいいデザインか」という、そういう工業製品などの形のデザインではなくて、ある活動自体をデザインしていく。それは、常に自分たちが振り返りながら、位置づけながら次に向かっていく、反省的に進んでいくということです。それを私は「進化的デザイン」とよんでいます。

こういったデザインは、大学、あるいは学校だけでなく、今、日本の会社やその他の組織の中でも必要なことですし、それが社会の持続可能な変革へとつながっていくことだと思って、日々仲間とともに実践しています。

どうもありがとうございました。

質疑応答

○家城 美馬先生、ありがとうございました。

ここで5分ほど時間をとりまして、質疑応答の時間としたいと思います。挙手を願いたいと思います。時間が限られておりますので、1人1つで簡潔にお願いしたいと思うのですが、どなたかございますでしょうか。記録をつくりますので、最初に所属とお名前をいただければと思います。

質問1

○学外からのご来場者 三重中京大学の清水と申します。先生のお話は大変よく理解できたつもりなのですが、やはりこういうことをやるためには、新しい大学で新しいスタッフ、教員がいて、さあ、一緒にいくわよというほうが、私は楽なような気がするのですが、この後、立教の観光学部の説明もありますが、もう既にできてしまっている大きな大学で始めるのと、こういう形で始めるのと、どちらが楽だと思いますか。国際教養大学も若干こちらに似ているのかなという気がします。その点についてはいかがですか。

○美馬 新しい大学だったからできたんでしょうというのは、確かにその部分は大きくあります。でも、今、職員は市役所からの出向の方が多く、2、3年で替わっていますし、教員も70人のうち半数以上がもう新しく入ってきた人たちです。

そういう中で、新しく課題が出てきたときに、どうやって変えていくかということについては、トップダウンではないんですね。つまり、大学を始めたときには、こういうことをやりたいと言って、私たちは設置審に対して申請書を書きましたけれども、実際にやるのは教員たちです。プロジェクト学習の運用のしかたにしても、現在かなりシステム化されてうまく動いていると思うんですが、お互いに職位とか職種などを超えて、問題に対してどういうふうにしていくかということを中心に話し合えるようなコミュニティになっているかどうかだと思います。

あるいは、なっていなかったとしたら、そういう人を探し出す。食堂に行くと教員同士で愚痴が始まるわけです。「もううちの学生は何もわかっていない」、「僕のところもそうだ」とか、「私のところもそうだ」と。でも、そのときに、では何かできることはないのかとあって、小さなグループで、仲間始める。実はそ

れが大きな制度になっていくことってあるんですね。例えば、プロジェクト学習の中間発表会も、最初はみんなでやろうと言ったら、「そんなの嫌だ」という人たちがいて、ごく一部の人が有志で始めました。それをみんなが見えるところで始めたんです。そうすると、「あんなのだったら楽しそうだし、うちなんかもっとすごいのに、やればよかった」とか言って、その年度末には全体の発表会になってしまったとか。それから、「それをするんだったらもうちょっとシステム化しよう」という人たちが現れてきたりして、何人が問題を共有する人が集まる。それを少しやり始めたら、仲間を増やしていくんですね。増やして、それをあえて見るところでやっていくと、それがやはりどんどん、どんどん広がっていくことがあります。机を勝手に動かし始めてしまったりとか。

だから、どういう人が面白そうなことをやっている人なのかとか、それは職員の人から声がかかってくることもあるし、こちらから誘うこともあるし。それから、例えばうちのライブラリーなどもすごく面白いことをいっぱい、かなりぶっ飛んだことをやっています。それはライブラリー委員会というのに、教員の人もライブラリストaffも出るので、そこで何か新しいアイデアを見つけて、「じゃあ、それをとりあえず一緒にやってみようか」、みたいな形になるんですね。多分そういうことは、例えば今日立教大学の新しい建物を見せていただきましたけれども、新しい空間があって、「もっとこちらでこんなことができます」とかいうと、そういうことをやりたい教員の人たちが多分集まってくるんじゃないかと思うんです。それを一人ひとり集まってくるんだったら、ほかの先生もしたがっていたとかいって、そういう教員同士を束ねたりして、さらにそれをライブラリーの中で、何か新しいことができるんじゃないかと、そういう先生方にお声がけをして委員会をつくってしまうとか、いろいろやり方があると思います。何もトップダウンで、命令でというよりは、実は草の根で起こっているものをうまく拾い上げるとか、あるときはそれを制度化したほうがうまくいくとか、そういうことがあると思います。

○家城 ほかにございますでしょうか。

質問2

○原田 法学部の原田と申します。本日は大変貴重なお話を伺いました。ありがとうございました。

質問なのですが、学習の共同性と社会性ということを考える場合に、立教大学も、先ほど先生がおっしゃいましたように、図書館を整備したり、ラーニングコモンズというような空間を整備したりしておりますが、やはり人的なリソースの問題でございます。TA、SA という制度を設けたり、あるいはまた制度をバージョンアップさせようとしておりますけれども、いかんせん、例えば理や文を除いては、なかなか大学院生が調達できない。さりとて、外部にもその専門性を持った人間の市場も存在しないと。社会性、共同性を確保する、つくり出すために、そういう人的リソースを、はこだて未来大学ではどういうふうに確保していらっしゃるのか、お聞かせいただければと思います。

○美馬 スタッフは自分たちで育てるんです。最初からそういうマーケットがあるわけではないし、どういう人が必要なんで、何か機能のようなものを列挙しても仕方ありません。私たち自身も、例えば今までのうちのライブラリーの人たちは、やっぱり司書という資格を持っていて、本の番人であるということは変わらない、最初はそうでした。

でも、私がライブラリー長になってから、もっと面白いことをしようよ、せっかく未来大学なんだしといっているいろいろ出していくと、実はみんなアイデアを持っているんですね。そういうことで、どんどん、どんどんその枠を広げていく



法学部 原田 久 教授

ような形。だから、教員と職員とか、そのライブラリーの人がお互いにこういうことができたらいいのにね、みたいなことを、「では、それをこっちで引き受けましょう」とか、「こっちでやりましょう」とか、そういった話になってくると思うので、まずはそこではないかなと思います。

それから、私は、大学院は教育学出身で、今日いらっしゃる寺崎先生が学部長でいらしたころに大学院生でした。寺崎先生、教育学で修士号を取った人はなかなか就職できない人がいますよね。なので、教育のことはすごく、理論も知っていて、自分自身が教育に携わることが好きなのに、なかなかそういう職に就けない人もかなりいると思います。だから、何らかの形で JREC-IN か何かそういうところに募集を出すと、多分結構いるんじゃないかと思います。そこでは、例えば今のライブラリーでそういうことをやりたいということだったら、ライブラリーの職員の募集ということよりは、そこの教育のスタッフ募集で、修士以上の、心理学、あるいは教育学の背景を持った方とかいって、特に社会経験があったりするととってもいいと思うんですけど、そういう方といえば、かなりいるのではないかと思います。

○家城 ありがとうございます。後でディスカッションの時間もとってございますので、とりあえず質問はここで終了にさせていただきたいと思います。美馬先生、ありがとうございました。

配付資料 ①

△ 講演中に使用されたスライドから一部の写真、絵画等を除いて収録しています。

【スライド①- 1】

これからの大学の学習環境デザイン

学習支援のあり方を中心に

美馬のゆり
公立はこだて未来大学

学びが高まる学習環境とはーハード、ソフト、コミュニティ

立教大学大学教育開発・支援センターシンポジウム
2012年10月24日

The slide features a central photograph of students in a classroom setting. The text is arranged in a clean, modern layout with a dark background for the title and a lighter background for the main content. A small logo is visible in the bottom right corner.

【スライド①- 2】

研究領域

情報工学

教育学

認知心理学

- 学習科学
 - 人がいかに学ぶかについての理解に基づいて、人の学習過程を支援するための科学
 - 現代のテクノロジーを駆使して実効性のある教育のシステムを、教育実践の中で作り上げようとするもの

(三宅・三宅・白水, 2002)

The slide displays a Venn diagram with three overlapping circles labeled '情報工学' (Information Engineering), '教育学' (Education), and '認知心理学' (Cognitive Psychology). To the right, a list of bullet points defines '学習科学' (Learning Science). The background is a light gray with a dark header.

【スライド①-3】

江戸時代の寺子屋における学び

- 寺子屋
 - 江戸時代 (1603 - 1867)
 - 庶民の子どもを対象とした初等教育機関
 - 現在の小学校の倍の数が存在
- 特徴
 - 基本は自学自習
 - 個人に合わせたカリキュラム
 - 同室にいながらも異なる課題に勤しむ
 - それぞれの子どもに対する教師の指導がそこに
いる子どもたちにそれとなく聞こえてくる
 - 教師自身の生活も見え隠れしている

【スライド①-4】

境界のあいまいさ

- 内と外
- 単独と共同
- 形式的と非形式的
- 日常と学校
- 気配
 - 先達の日々の活動から見えてくる歴史や文化

【スライド①-5】

住宅のスタイル

- 和式
 - お茶の間
- 洋式
 - リビング
 - ダイニング
 - 書斎
 - 寝室
- 1部屋
 - 多機能
 - 1機能

【スライド①-6】

典型的なキャンパス


- 教室棟
- 研究棟
- 事務棟
- 図書館
- 食堂

- 未来大学 all-in-one

【スライド①-7】

ゼロからの大学デザイン

- 2000年4月 開学
 - 設置母体は函館圏広域連合(1市4町;2市1町)
- 情報系の単科大学(システム情報科学部)
 - 情報アーキテクチャ学科(120)
 - 複雑系知能学科(120)
 - 博士課程前期(50)後期(10)
- 1996-2000年 計画策定専門委員会
 - 学部学科の選択
 - 教育理念の構築
 - カリキュラムの開発
 - 同僚の確保
 - 建築家を選出し、共同で校舎をデザイン
 - 15,000点におよぶ備品(ごみ箱を含む)の選択など
- 著作『未来の学びをデザインする —空間・活動・共同体—』
- **学習の共同性と社会性**



『未来の学びをデザインする』
新しい学びのスタイルとは?

【スライド①-8】

学習環境への新しいアプローチ

- 正統的周辺参加論の考え方
 - 学習は個人の単なる知識の獲得ではない
 - 個人の集団へのかかわりが強まっていくプロセス
- 学習の共同性
 - 二人以上の人間が、協調的に活動することによって理解が深化するという学習の特性
- 学習の社会性
 - 学習は社会的に意味のある活動の中で動機づけられるという学習の特性

【スライド①-9】

制度のデザインと空間のデザイン

- 制度のデザイン
 - プロジェクト学習の実施
 - 3年生全員が1年かけて、教員も学生もチームで、実社会の問題解決に取り組む
 - チーム・ティーチングの採用
 - 学内共同研究の奨励
 - 授業フィードバック・システムの開発と運用
- 空間のデザイン
 - 全ガラス壁の教室、異なる形式の教室
 - 異なる教育スタイルの共有
 - オープンスペースの設置
 - 多様な学習スタイルの保障
 - 公共施設の配置
 - ライブラリーやミュージアムを正面入り口に配し、一般に公開
 - 学内全域のLAN設備と必携のノート型パソコン
 - 全教室にプロジェクタ、全机に電源
 - 知の共有と蓄積、コミュニケーションの促進

【スライド①-10】

新たな学習支援組織の必要性

- 背景
 - 大学の大量化から派生した問題の解決
 - 日本では
 - 初年次教育、リテラシー教育、キャリア教育、学士力など
- 日本における初年次教育（濱名, 2006）
 - 大学生活への対応（大学生生活、学習、対人関係など）
 - 大学での必要な学習技術の獲得（読み、書き、批判的思考力、調査、時間管理）
 - 当該大学への適応
 - 自己分析
 - ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入
 - 学習目標・学習動機の獲得
 - 専門領域への導入
- 現状
 - 教育GP指定校などが、問題に個別に対応

【スライド①-11】

米国における学習支援組織の系譜

- 大衆化をすでに経験している米国の大学
- ライティング・センター
 - 1965年 大学進学率50%突破
 - 読解作文の支援
- ラーニング・センター
 - 1990年 大学進学率60%突破
 - 理数系科目、学習方略の支援
- ラーニング・コモンズ
 - 2005年～ 図書館との融合(場所、人材、資源、機能)
- (調査)ラーニング・センター
 - 設置の歴史的背景
 - ラーニング・センターの組織構造
 - センターの構造と学内での位置づけ
 - カリキュラム
 - 物理的環境
 - スタッフのスキルと人材育成
 - 専門スタッフ
 - 予算と評価

【スライド①-12】

テキサスA&M大学

- 学生ラーニング・センター
- ミッション
 - 特別に設定したコース(講義)やプログラム、サービスを提供することにより、テキサスA&M大学の学部生の学業の継続(中退の防止)と学業における成功を促進すること
- 大学内の学習支援活動の組織化する
 1. 大学内の他の学習支援サービスの存在を知る
 2. 個々の教員が行っていることあるいは問題としてとらえていることについて、状況を把握する
 3. それらの解決としてプログラムを効率的で効果的な学習支援活動の実施
 4. 関連する学内組織や教員との連携が鍵
 5. プログラム開始後も毎年、最新の学生の傾向を把握し、プログラムを修正していく
 6. オンライン・チュータリングなど、ICTを利用する可能性についても検討
 7. それらを踏まえた上で、予算、人材配置、実施場所などとのすり合わせを行う

【スライド①-13】

テキサスA&M大学

- 学生ラーニングセンター
- センター長
 - 学習支援プログラム長(ピア・エデュケーション)
 - チューターゾーン・チューターたち
 - SIプログラム・コーディネータ
 - SI学生アシスタント
 - 学生SIリーダーたち
 - 教育プログラム長
 - 講師2名 (Lecturer)
 - 補助講師1名 (Assistant Lecturer)
 - 補助講師2名うち1名は臨時雇用
 - IT、Web担当
 - プログラム・コーディネータ
 - プログラム・アシスタント
 - 補助講師1名(Assistant Lecturer)
 - 学生アシスタント(数学担当)1名
 - 事務系コーディネータ
 - シニア・オフィス・アシスタント
 - 学生アシスタント

```
graph TD; A((Student Learning Center)) --- B((補習教育)); A --- C((ピア・エデュケーション)); A --- D((コース(講義))); A --- E((学習指導)); B --- C --- D --- E --- A;
```

【スライド①-14】

タラハッシーコミュニティカレッジ

- ラーニングコモンズ
- 2008年にラーニングコモンズとして一本化
 - 学内に点在していた学習支援の組織を全学生対象に
 - 図書館司書との協力関係の構築、教員との連携
 - 学期の最初の5週間で9000人が利用(学生数1万5千人)
 - 1階が自然科学、2階が人文科学、図書館へもそのまま移動可
 - 教員やチューターが質問者のところに出向く
- 運営5原則
 - Inclusive(全レベルを対象とする)
 - Integrate(重複したサービスをなくす)
 - Pro-actively(既存のリソースを有効活用する)
 - Collaboration(スタッフ間で協力しあう)
 - Responsibility(責任を持って取り組む)

【スライド①-15】

フロリダ州立デイトナ大学

- アカデミック支援センター
 - 2階と3階が数学や国語の教室
 - 1階がセンター
 - ・ 講義での宿題はセンターで
 - ラーニングスペシャリストが常駐
 - ・ 専門職員の位置づけ
 - ・ 教員のオフィスアワーにも換算
 - ・ 質問者が教員やチューターのところに出向く
- 運営3原則
 - 柔軟性
 - シームレス
 - 統合化

【スライド①-16】

新しい学習理論とラーニングセンター

- ラーニングセンター
 - 学生が効率的かつ効果的な学習者になることを支援
- 高校から大学生活へのスムーズな移行
 - 3Rのみならず、学習技術や時間管理法の習得
 - キャンパス内の人的、物理的資源の活用を強調した課外教育
 - 多様な人材との接触
- 結果として
 - 退学率の減少
 - 学生生活、社会生活のスキルの向上
 - 大学というコミュニティへの参加
 - 学習者としての学生の自己認識や能力の強化
 - 学習意欲や自信の向上
 - 学習に対する積極性の向上
- わが国における展開
 - ラーニングセンターを中心とした学習支援活動の組織化の可能性

【スライド①-17】

メタ学習ラボの設置

- 大学の大量化から派生した問題の解決
 - 初年次教育、リテラシー教育、キャリア教育など
- 新たな学習組織の必要性
 - 授業時間外
 - 学習方略(メタ学習)の支援
 - ピアチュータリングを採用
 - 学生、職員、教員



【スライド①-18】

「持続可能な学習環境」のデザインに向けて

- デザイン原則
 - 空間、活動、共同体
 - 道具、デザイナー
- チームの発想
 - 参加と協働
- 学習の共同性と社会性を基軸にした
 - 持続可能な学習環境デザイン
- 進化的デザイン
 - 学校を超え、組織、社会の持続可能な変革へ

第 2 部

立教大学新座キャンパスの 学習環境整備 —プロセスと実践—



観光学部長

村上 和夫 氏

新座キャンパス事務部教務課 職員

田村 未央子 氏

○**家城** 引き続き後半に移りたいと思います。このシンポジウムは「学習環境」という言葉をタイトルにしております。先ほどの美馬先生のお話で皆さんお気づきだったかもしれませんが、ご著書のご紹介がございました。『「未来の学び」をデザインする』というご著書ですけれども、この副題が「空間・活動・共同体」です。実は我々は、このシンポジウムを準備しているときにこの本に出会いまして、開催趣旨に照らしてちょうどいいということで、このシンポジウムの副題にも「ハード、ソフト、コミュニティ」とつけさせていただきました。

今の美馬先生のお話にもありましたが、図書館等のハードウェアを準備するという。それから、いろいろな仕組みを準備するというだけでは、やはりこれからは足りない。コミュニティをしっかりとっていくことも大事だろうということをおきまして、ここからの議論を続けていきたいと思っております。

学習支援というのがここからの大きなテーマでございます。先ほどの話にもありましたが、ユニバーサル化や学力低下ということを背景にして、学習支援というものが随分議論されてきました。でも当初は、初年次教育とか、リメディアル教育といったものが関心の中心だったわけです。

今や、ご講演にもありましたように、ラーニングコモンズとかラーニングセンターというところに関心が移ってきたかと思っております。そこで、今日学外からお越しいただいた方々のなかでご希望なされた方には、新しくできた図書館、ロイドホールというところですが、ここを見学させていただきました。この新しい図書館のなかにも、ラーニングコモンズという機能があります。この図書館は、実はまだできて1カ月というところでございますけれども、これからです。その中身と

してはいろいろなことが考えられています。

立教大学はもう1つ、新座にキャンパスがございます。新座キャンパスのほうには3つの学部があるのですが、ここでは既にこの4月からラーニング commonsの機能が実現して、既に半年ですが、経験を持っています。「しおり」という名前が最近つきました。

後半の事例報告の1つ目は、新座キャンパスにおきましてラーニング commons という学習環境ですね、これを準備されてきて実現された経緯に関しまして、観光学部長の村上先生と、新座キャンパス事務部の田村さんのお二人からまずお話をいただきたいと思います。

よろしく願います。

1. 学生は何を求めているのかーラーニング commonsの必要性

○村上 ただいまご紹介にあずかりました観光学部長の村上でございます。

私は教育学が専門ではございませんので、私の専門の観光学の一分野であるホスピタリティビジネスならびに、学部長をしておりますので教育組織のマネージャーという立場から、教育施設の一環としてラーニング commonsをどう考えるのかということについてお話をさせていただきます。

そもそも観光学部というのは、どこでもそうですが、職業人育成のための学部で無く社会科学の一部ですので、社会学や経済学と教育施設に共通性が高い部分がございます。

観光学の研究分野の1つに「ホスピタリティ」というのがありまして、日常語としては「人に親切にする」という事を指しますが、その具体的な形は「サービス」として表現され時に商品として売買されることがあります。この「サービス」が販売されるとき、利用者（客）は、その生産に参加しなければサービスは売れないという原則があります。例えば、タクシーに乗るとき、客は行き先を言わなければタクシーは動きませんし、到達目標の近所で客は道案内をしたりもします。客が参加しないと商品としての「サービス」は生産することも販売することも出来ないということが世の中にはあります。

ですから、教育をサービスの1つと考えると、利用者（客）である例えば学生に「何が勉強したいの」とか、「どうやって勉強するのがいいの」とかいうよう

なことを聞き、「あなたがそれを勉強したいなら、こうして勉強していきましょう」というように誘導していくのが、本来創らなければならない環境でしょう。そして、「サービス」には重要な原則があり、それが「物に体化する」という特性です。例えば、図書、教室やコンピュータ、インターンシップ先の企業、すでに一定の認識を得ている理論などを示して、それらを使うことで生み出される効用が「サービス」なのです。

さて、教育をこのように「ホスピタリティ」を持つ「サービス」と考えるときに、学部長としてその組織を運営するとき、現在まず直面する大きな課題として、教員組織やそれを支援する組織の効率的な経営、研究費による成果の効率的な創出などがあげられます。学生からの納付金、公的な補助金、各種の研究費について公明正大な利用はもとより、その一環としての効率性は非常に重要な課題となります。それが達成されたときに教員が学生と創造的な自由な時間を潤沢に持つことが可能となります。

そして、学生の生活をみていましても、学生生活にアルバイトは不可欠な要素となっており、毎日の生活時間の配分の効率化は、彼らの重要な生活スキルとなっていると言えます。自分の自由な時間や友人との交流は、アルバイトと大学での授業等への効率的な参加により創り出されていくことは疑いのないことです。

ところが、授業というのは最近、教授法の開発や授業評価の徹底などで、する



側のスキルの効率化は進んでいるのですが、それに比して学生の勉強とくに学修が効率よくなっているかという点、勉強を効率よくするための教育が与えられていないという問題点があるように思えるのです【スライド②-2】。学生のアルバイトの時給をみますと、埼玉県南部から東京都は自給が800円から1,000円程ですが、あきらかに大学の時間当たりの学費はこれよりも高いものですから、2倍3倍とより効率の良いものでなければなりません。たしかに、学生の生活時間をみると授業出席や学修時間の合計がアルバイト時間と拮抗するか、人によって少なくなっている傾向をみることができ、数字からは教育の効率は小売販売業や飲食業あるいは軽作業事務などよりも高い状況を窺うことができます。

しかし、これが数字のまやかしであることは、ここにご出席の皆様には周知の事でありましょう。効率的な授業や学修とはどのようなものでしょうか。授業内容を理解し内容を記憶しアチーブメント試験に合格することでしょうか。学修についての各種文書の記載が予習復習となっていることに鑑みるとそれは重要な点のひとつでしょう。しかし、他方で世界が注目している日本の特徴に「創造性」があることは、ここにおいでの皆様ばかりでなく、国内でもひろく周知のことです。

「創造性」を育てる。これも高等教育の大きな課題なのです。もちろんそれは習得した知識の上に成り立つものですが、「創造する」行為を育む環境と指導が無ければ、それは育成されない能力と言うこともできるのではないのでしょうか。とくに、企業がR&Dに大きな費用をさくのが難しくなり、組織内訓練もコンプライアンス向上に向けられるとすると、「創造性の育成」に対する大学の社会的役割は、従来以上に大きくなって来ていると考えられます。

我々が大きく反省すべき点は、この「創造性の育成」という意味で、今の教授法そして教育施設は十分に効率的なのかという点です。学修を媒介に学生の中にどのように講義と演習の体系性を確保していくのが大きな課題なのです。これは、ようやく広く気付かれるようになってきた、①学修をどうやって体系的に進めるか、そして②それをいかに組織的に支援するか、③そのための施設をどのように整備するか、といった教育の実質化という問題なのです。その運用に学生の参加が不可欠という点で、この「創造性の育成」を組み込んだ教育は、ホスピタリティサービスであり、教育のオープンサービスイノベーションなのかも知れません。

さて、もう1つ現在の高等教育には、社会状況に適合すべき課題があるように、私は思えるのです。それは、ソーシャルネットワークの普及により生じた「共有」という意見集約の現象を教育に取り入れることです。

私たちがSNSなどのソーシャルメディアの上で「共有」するとき、「いいね！」と押し、コメントを送りますね。さらに、誰かにそれを教えます。我々の日常生活の中で「共有」というのは当たり前の現象となっているのに、学生には個人で勉強するということを一生懸命に指導するという矛盾が生じています。学生が「共有」しながら勉強することに慣れているときに、それを教育の中で、施設の上で達成する術を用意する事は重要な課題のひとつだろうと思います。

さらに、グローバル化やコンビニエンス化のような社会の中で標準化して来ている基盤を教育施設のマネジメントの中で標準化させることも必要な要素です。そして、一生懸命、クリエイティブにやろうとして失敗する学生を後押しすると同時に、失敗した人に優しくしてあげるということは重要なことで、この部分が大学の思い出や大学の価値に繋がることを再確認するということもあります。

以上の課題を、教員による教育の効率的なサービスと関連させ、さらにどうやって施設空間にゾーニングしていくのかが、重要な課題です。教員が一生懸命頑張っても、学生を組織化して「創造性向上プロジェクト」により補助事業を得たとしても、やがて労働が過剰となって「先生」が息つきてしまえば、それを見ている学生には悲しすぎ、意味の無い精神主義に終わってしまうのです。

要は、教員による教育の改善も必要ですし、学生のモチベーションを向上させるプロジェクトも重要ではありますが、それを支援する時代に即した空間の整備や施設設備の配置も重要な課題と言わざるを得ません。

「創造性を育成」は、簡単ではありません。場面により、人により、そして社会が必要とするそれとの関係において非常に多様でしょう。しかし、おそらく共通する点は、要素を適切に構成する行為を軸にしている点と考えられます。個人の「創造性」も重要ですが、それを基礎に、情報を「共有」するグループにおいて「創造的に創り上げていく」集団の行為も重要です。ことに大学にそのための空間がゾーニングされ、奨励されることが大切な時代となっています。

近年、大学は安全性に配慮することから教室を含め施設を強く管理するようになってきました。以前は自由な空間であった教室は、授業が終わると鍵が締められる場所に変化する傾向がみられます。学生はどこに集まって自分たちの情報を創

造的に「共有」したら良いのでしょうか。そういう場所を明確に示すことが重要でしょう。

このことを考えるときに、実は古い例ではありますが、ニューベンチャービジネスの学部や学科で考案されたハチャリ (hatchery) 型教室 (あるいはインキュベーションルーム等と言う) という施設が参考になると言えます。観光学部では、経営系の教員がそれを紹介し、図書館の改築のときに設置することになりました。現在この施設を機能的には「ラーニングcommons」と称し、ニックネームとして“しおり”と名付けて利用しています。

それでは、それがどのように使われているかを含めて、田村さんより説明させていただきます。

12. 教職協働と部署間連携にもとづく計画プロセス

○田村 立教大学新座キャンパス事務部教務課の田村と申します。よろしくお願いいたします。

私からは、新座キャンパスの図書館の中にこの4月に開設されましたラーニングcommonsについて、開設までのプロセスと利用状況などをご報告させていただきます。



新座キャンパスは2006年度以降、学部・学科の新設が相次ぎ、学生数が6年間で倍増しました。現在、学生数5千名弱のキャンパスです。ここ数年、頻繁なカリキュラム改革が行われるようになり、科目数の増加、授業スタイルの多様化が進みました。

これらに対応するために、新教室棟の建設など、施設整備を行ってきましたが、その一環として、学生数増に対応した図書館の拡張と、新たな学習支援スペースの整備ということが大学の中で意思決定され、2011年2月に「新座学習支援スペース検討委員会」が設置されました。この委員会には新座にある3つの学部の教員と、図書館や、私の所属する教務課など、関係の事務部局からメンバーが集まり、部署間の連携、教員と職員の協働によって、このスペースにどういった学習空間をつくるのかという検討を始めました【スライド③-2】。

整備計画にあたって参考にしたことはいろいろあるのですが、2年前に「新座キャンパス卒業生アンケート」を実施した際に、「在学中に身につけておきたかったということ」の上位に、「プレゼンテーション能力」「人にわかりやすく説明する能力」といったものが挙がっていたということがあります。このことは卒業生に限らずに学生についても未だ同様のことがあり、教務課の窓口でも日常的に、「ゼミの準備をする場所がどこにありますか」というような質問がありますので、学生がグループで学習したり、議論したり、発表の準備をしたりする場所を求めている、という認識がありました。この点は計画の際のベースになったと思います【スライド③-3】。

また、図書館サイドでも、グループ学習や各種の講習会ができるようなスペースを整備したいという強い意向を持っていましたので、新しく図書館を拡張していくという計画と、新しい学習支援スペースの整備というものを、一体化して考えていこうという流れになっていったわけです。

新座の各学部の教員からも、村上先生のお話にもありましたが、グループ学習の場が必要であるといった意見をたくさんいただきました。また、3つの学部から委員が出ていることで、各学部のカリキュラムや教育の特色によって、想定している「グループ学習」のイメージは随分違うものだということも見えてきました。

こういったことを総合して、他大学の事例なども参考にしながら具体的な計画に入っていきました。今回の整備計画の対象エリアは、その下の1階部分が既存図書館のフロアだったので、1階はこれまで通り「静かに学習する場所」、新た

に整備する2階は「グループで学習のできる、わいわいと話し合いながら学習できる場所」というフロア分けをすることになりました。また、1・2階全体を図書館施設と位置付けることで、図書資料を貸出手続きなしで持っていけるというメリットが生まれることから、この新しい学習支援スペースを図書館施設として管理・運営するのがよい、ということも委員会の中で決めていきました。

主なポイントとしては、資料に挙げたようなこと（可変性・可動性、アウトプット可能、快適性、バリアフリー、レクチャースペースなどのハード面整備とソフト面の充実）を考えたのですが、例えば、「快適性」については、飲み物は持ち込めるようになっていますが、食べるということについては、この図書館のゲートを出たすぐ隣のフロアにアメニティスペースをつくることで対応しました【スライド③-4】。

また、資料に挙げた項目以外にも、環境というのは人を育てる上でとても重要であり、環境から生まれる学習文化のようなものもあるということで、なるべく自然素材を採り入れようとか、長期的に課題に取り組むグループには資料を保管するロッカーを用意したい、といった意見やアイデアがいろいろあったのですが、やはり限られた予算や面積や工期ということで断念したところも多々あります。

【3. しおり(新座図書館ラーニング commons)の概要】

こうしていろいろ検討を重ねてできたのが「しおり(新座図書館ラーニング commons)」という施設です。この愛称的につけられた「しおり」という名前は、利用開始後、2カ月ぐらいたったところで公募を行って、正式な名称を決定しました。面積や席数、利用時間などは資料にあるとおりです【スライド③-5】。

大きくは3つのエリアに分かれております。写真を見ながらご説明いたします【スライド③-6】。1階の静粛なフロアから館内の階段を上がっていきますと、2階の「しおり」のフロアに入ります。2階から直接入るゲートも2カ所あり、そのいずれのルートから入ってもまずカウンターがあります。常駐のスタッフのほかに、平日の午後にはラーニングアドバイザー（これは大学院生が担っています）が控えており、カウンターで相談に乗ることもあれば、学生のグループの中、つまりフロアに出て相談に乗ることもあります。

第1のエリアは多目的スタジオです。この写真は情報検索研修会をやっている様子です。

る風景なのですが、このほかにも図書館活用講座や、オンラインデータベースの利用方法の講座など、いろいろな講習を開催しています。

第2はグループエリアです。いろいろな形態や人数規模のグループ学習を自由に行えるように備品類や機材がそろっています。車いすの利用者も同じテーブルを囲めるように、天板の高さが変えられるようなユニバーサルデザインの家具なども採り入れています。

第3はグループ学習室という個室エリアです。4部屋ありますが、学部によって想定する「グループ学習」のイメージが違っていたので、あえて各部屋の備品を違うタイプのものにし、いろいろなスタイルに対応できるように整備しております【スライド③-7】。

4. 利用状況と学生の変化

利用状況については、4月にオープンして以来、月を追うごとに利用者が順調に増えています【スライド③-8】。時間帯も、昼前後から夕方にかけてがやはり多いのですが、この時間帯は教室も稼働率がとても高く、空き教室の利用が制限されているので、その分、こういう施設の利用者が増えているのかなと分析しています。

「しおり」ができてからの学生の様子を図書館のスタッフに聞いたのですが、まわりのグループの様子を感じることで活動が活発化するという効果は実際にあ



るようです【スライド③-9】。また、各エリア間の壁は、ガラス張りになっています。そのため例えば、グループエリアのほうから多目的スタジオでの講習会の様子が見えていることで、以前よりも講習に出ている学生の集中力や緊張感があり、講習の受講態度がよくなったというようなことも聞きましたし、講習を外から見ている学生たちが「ああいう講習会をやっているのだったら、自分も次は出てみよう」という気持ちになるといった、ちょっとした宣伝効果のようなものも見られるということです。

また、「しおり」の開設を機に、ラーニングアドバイザーの配置を1階から2階のスペースに移したのですが、今まで通りの「資料検索方法」や「レポート作成方法」などの質問に加えて、最近では「プレゼンテーションの資料作成方法」や「発表手法」などについての相談も受けるようになってきたと聞いています。

【5. 学生の声と新座キャンパスの利点を生かして一層の整備を】

今後に向けてということでは、やはり施設をつくっただけで終わりということではなく、施設やスタッフやサービスをより使ってもらうためにどうするかということを考えていくことが重要だと思います。利用拡大や活性化に向けた取り組みというのは、やはり部署を超えた連携の中で継続していく必要がある、と考えています【スライド③-10】。

また、今回整備した施設は最終的に図書館施設という位置づけになりましたが、学習支援スペースというのは、図書館に限らないと思いますので、キャンパスの各所にあるラウンジ的なスペースやアメニティスペースが、時には学習の場にも成り得るようにしたい、と考えています。例えば、そういったスペースに自由に使えるパソコンを置くというようなことが考えられますが、そういう整備は特定の部署が単独で考えるのではなくて、やはり連携してトータルな視点で、キャンパス全体で考えていくことが必要かと思っております。

また、オープン以降、「こういう施設ができたよ」という広報活動みたいなどころから始めましたが、半年たってある程度認知されてきたということで、後期に入ってからは「新座学習環境アンケート」を実施しました。これはウェブで行ったアンケートですが、220件ぐらい回答がありました。本日は時間がなかったので詳細はご報告できないのですが、自由記述などを見ると、「しおり」を含めた新

座キャンパスの学習環境については、おおむね満足しているといった、好意的な意見がとても多く書かれていました。

「しおり」で利用している機器、備品類についての意見、利用するとき何人ぐらいで利用しているか、利用の目的などについても聞いているのですが、これらの結果を見るとかなり学部・学科によって使い方が違うんだということが見えてきて、こういった点は各学部にもフィードバックをして、学部教育の充実に向けたひとつの材料としていただけたらいいなと思っております。

池袋キャンパスでは、先日新しい図書館がオープンしました。立教大学の場合、2つのキャンパスが比較的近い距離にありますので、新座の学生が池袋の授業を履修したり、池袋キャンパスを利用したり、ということもとても多く行われております。今後、新座の学生が池袋の図書館を利用する機会が増えてくると、当然、キャンパス間を比較して、新座の学習環境について、新しい要望や不満などが出てくだろうと予測しています。スケールメリットやアクセスのよさといったところは、新座キャンパスは池袋キャンパスには勝てないところがあるわけですが、新座キャンパスの規模だからできる部分ということもいろいろあります。例えば、学部が3つなので、学部の意見を十分に聞いて施設整備や備品選定するということもできましたし、比較的コンパクトなキャンパスだからこそ部署を越えた連携ということも、各事務部局間で密にできているのではないかなと思います。

こういった部分を大事にして、学生の声を丁寧に聞いて、ソフト面の充実を図っていくということが、新座キャンパスの学習環境整備のとるべき方向性なのかなと考えております。

以上、駆け足でしたが、私からの報告を終わらせていただきます。

16. 新座キャンパスにおけるオーバーフロー学生への対応策

○村上 先ほど田村さんから説明がありました利用状況【スライド③-8】ですが、今、ここで見ていただくと時間帯によって非常に大きな稼働の差があることがわかります。新座キャンパスは、池袋駅から30分から40分ぐらいかかりますので、学生は通学に往復で約1時間半の余分な時間を費やさなければなりません。当然、キャンパスでの滞在時間を節約しようとするため、ラーニングコモンズの利用も集中がみられ、高い変動を見ることとなります。一方で稼働率の繁閑

の大きな施設について気をつけなければいけないのは、繁忙時間に収容力を合わせると、それは稼働率の低下を生むこととなります。従いまして、対処としては繁忙時間にオーバーフローする学生を他の類似施設に収容する方策を講じることが必要となります。

新座キャンパスで、この問題を解決しているのが「こかげ」というカフェタイプの学食です。昼食時間を中心に食事を提供するが、カフェ風のビバレッジも提供し学生がそこで勉強しやすい空間を用意することによって、オーバーフローする利用者を収容するバッファーとして機能しています【スライド②-3】。

7. ラーニングcommonsと授業の積極的接続

最後に整理をさせていただきますと、まずラーニングcommonsを造っても、美馬先生のお話のように、教員が学生にラーニングcommonsを利用するよう誘導していくことが大切になります。重要なのは、例えばある種の課題が出たらラーニングcommonsに行って集団で作業をするように誘導し、効率よく勉強ができる方法を示すことです。

次に、「共有」の価値と方法を伝えるために、先生やTAが学生のコミュニティを作りながら誘導することです。学生の多くは、すでにSNSの利用になれており「共有」の面白さを知っていますので、それを教育に結びつけていくということです。授業のやり方というのを変えていくということが、実はこのラーニングcommonsの使い方では重要で、これは講義よりも演習のほうが適合しやすいでしょう【スライド②-3】。

それから、学修の価値を学生に理解してもらい、アルバイトに対して学修の弾性を高めることが重要です。基本的には、勉学のゴールやそれが自分の将来とどうつながるかということで、立教大学では、経営学部がこれに非常に成功しています。

8. ラーニングcommonsで提供すべきサービス

先ほど、ラーニングcommonsで不可欠なサービスとしてチューターのお話が来ました。これには私も賛成です。しかし、チューターの機能は、教科を中心とす

る学修の支援ばかりでなく、設備の使い方や「創造性」につながる討論の仕方などにも及びます。ことに、機器の使い方の問い合わせや効果的なプレゼンテーションの方法そして統計の使い方などに広がるでしょう。

ラーニングcommonsの施設や設備やアプリケーションは、チューターの負担を軽減し学生の基礎体験を高めるためにも、当然、教室や社会のプレゼンテーションルームと遜色ない水準を維持する必要があります。利用者である学生が、彼らの「創造性」を最新の機器の上で発揮し、どこに出ても困らないようにしなければならぬのですが、そのことは同時に、社会が求める“基底レベル”の施設やサービスを体験的に知る機会を提供することに繋がります。

大学は施設、設備や備品、サービスマニュアルなどを定期的に見直して、社会の常識的な水準に合わせる努力をし、教員はその水準を前提に学生に課題を出す必要があります。例えば、学生がインターンシップの報告のプレゼンテーションを実習先の企業でする場合、その企業の会場が備える水準と同レベルの施設水準をラーニングcommonsも備える必要があり、報告はそれに遜色の無い内容となるよう指導する必要があります。「学校の機器は、社会よりも劣っていても許される」という精神主義は、否定しがたいものがありますが、それが施設設備の整備を怠る言い訳になることは許されないのです。

さらに、「創造性」を高めるために、どのように情報を集めまとめていくかを示す努力も必要です。そのために、チューター以外にも、キュレーターのサービスも備えることが好ましいでしょう。ここは各学部任に任されることとなります。

例えば、観光の価値というのをどうやって統合的につくっていくのか。これが、実は大学院生が学部の学生に教えられることで、恐らく教育学の人だと、勉強の仕方は教えられるけれども、どうやってそれぞれの専門分野で必要なものを集めるかということは教えられないのではないのでしょうか。

最後に、保安上の問題。学生が大学に来てどのように安心して勉強できるかという問題があります。ICの時代になってきましたので、ICカードを利用しながら学生の位置というようなものがきちんと確認できます。学生が安心して勉強できる、何かがあったときにすぐに対応できるというようなサービスも、こういうところにはなければいけないと考えております。

○家城 村上先生、田村さん、ありがとうございました。

配付資料 ②

【スライド②-1】

事例報告① 新座キャンパスの学習環境整備
— プロセスと実践 —
ラーニング commons の意義

立教大学新座キャンパス事務部教務課 田村 朱央子
立教大学観光学部 村上 和夫

シンポジウム「学びが高まる学習環境とは」 — ハード、ソフト、コミュニティ — 2012/10/24

【スライド②-2】

ラーニング commons の必要性

1. 講義/演習と学修の効果的な統合コンセプト
 - 効率的な学修・・・ 学生の生活時間との調和（アルバイトに対する学修の弾性）
 - 「共有」と創造の場の提供・・・ 「創造的な扶助」、対面議論、S.N.
2. グローバル化を支援するサービス
 - コンビニエンスな環境・・・ 機器・アプリケーション、表現、マナーなどを自修する環境
 - 「孵卵器」教室・・・ New venture business 教育、医学のPBL教室
 - Curator service・・・ 図書館と友人の経験とインターネットで世界とつながる
3. キャンパス運営のサービス基準
 - キャンパスゾーニング・・・ 集中と共有、文化性、「甘い時間」の「場所」
 - 保安上の配慮

【スライド②-3】

まとめへのtips

1. 学修を可能とする教育指導

- シラバスや教材の工夫、課題と学修への手引き
- 成果の価値の確認 → アルバイトに対する弾性の向上

2. ラーニングコモンズで提供すべきサービス

- 内装、設備・機器、サービスマニュアルの定期更新
- Curator service 工夫

3. 利用変動と規模、安全への配慮

- キャンパスゾーニング 「こかげ」との 機能分担
- 保安上の配慮、利用時間の記録など

【スライド②-4】

おわり

ありがとうございました。

配付資料 ③

【スライド③-1】

事例報告① 新座キャンパスの学習環境整備
— プロセスと実践 —
「しおり(新座図書館ラーニング・commons)」の開設

立教大学新座キャンパス事務部教務課 田村未央子

シンポジウム「学びが高まる学習環境とは」 — ハード、ソフト、コミュニティー — 2012/10/24

1

【スライド③-2】

1. 開設までのプロセス (1)

1) 新座キャンパス

- ◆学生数 : 2005年度 2,000名 → 2011年度には5,000名規模のキャンパスへ
- ◆学部、研究科数 : 2学部2学科、2研究科 → 3学部7学科、3研究科
- ◆新学部・新学科設置やカリキュラム改革等による科目数増加・授業多様化

2) キャンパス内施設再配置計画の一環として学習支援スペースの整備を検討

- ◆新座学習支援スペース検討委員会の設置(2011年2月)

メンバー(委員会事務局含む) :

- ・大学政策・施設計画 → 企画課
- ・学部の要望 → 観光学部・コミュニティ福祉学部・現代心理学部教員
- ・現場の声 → 新座図書館、新座キャンパス事務部(総務課、教務課)
- ・その他必要に応じて、新座メディアセンター、施設課、設計業者、備品メーカー等が随席

➡ 部署間、教員・職員間の連携・協同

2

【スライド③-3】

1. 開設までのプロセス (2)

3) 整備計画にあたって：学習支援のために必要なスペースとは？

- ◆新座キャンパス卒業生アンケート(2010年10月～11月実施)結果から

「身につけておきたかった」と感じていること ⇒

 - ①外国語で意思疎通が図れる力(59%)
 - ②プレゼンテーション能力(49%)
 - ③人にわかりやすく説明する能力(42%)
- ◆現場の事務部局(教務課、図書館)が感じていること
- ◆学部・教員からの要望(「グループ学習」のイメージは学部により異なることが判明)
- ◆他大学の事例(国内外の大学の「ラーニング・commons」的施設について情報収集)

- * 図書館既存フロア(1階) ⇒ 静かにひとりで学習する
(調べもの、読書、レポート作成 等)
- * 新設フロア(2階) ⇒ 話をしながらグループでの学習ができる
(議論、共同で資料作成、プレゼン練習 等)

3

【スライド③-4】

1. 開設までのプロセス (3)

4) 整備計画にあたって：主なコンセプト


- ◆ハード面
 - ・可変性、可動性のある作業スペース → 組み合わせ自由な机・イス
 - ・広い作業スペース → 大きな天板のテーブル
 - ・アウトプット可能な設備 → 議論・プレゼンテーション用の機材・備品
 - ・オープンスペースと独立性のあるスペース → 広く使えるエリアと個室
 - ・快適性をあげるスペース → 飲食可能なスペース
 - ・バリアフリー → ユニバーサルデザインの備品
 - ・講習等レクチャーができるスペース → 大きなスクリーン、
講義教室風にも使えるエリア
- ◆ソフト面
 - ・図書館資料を貸出手続き不要で利用できる
 - ・ラーニングアドバイザー配置 等

4

【スライド③-5】

2. 施設概要 (1)

- 1) 正式名称 : 「しおり(新座図書館ラーニング・commons)」 ※利用開始後に公募により正式名称決定
- 2) 利用開始 : 2012年4月
- 3) 場所/面積 : 新座6号館2階 / 約450㎡ ※別途、隣接エリアに飲食可能なアメニティスペースも整備
- 4) 席数 : 約150席 ※図書館1階は約400席
- 5) 利用時間 : 月～金 8:45～21:30、土 8:45～20:00、日 10:00～17:00
- 6) 3つのエリア : ※図書館開館時間と同じ、時期により変動あり
 - ①グループエリア
(オープンスペース、多様な目的・人数規模に対応)
 - ②グループ学習室1～4
(4室それぞれ異なるタイプ、予約優先利用)
 - ③多目的スタジオ
(情報検索講習会・データベース利用講座・図書館活用講座等を開催、行事がない時はグループエリア同様に利用可)



5

【スライド③-6】

2. 施設概要 (2)

<1階から2階へ>	<カウンター>	<多目的スタジオ>
		
<グループエリア>		
		

6

【スライド③-7】

2. 施設概要 (3)

<グループ学習室1~4>

7

【スライド③-8】

3. 利用状況 (1)

1) 月別・時間帯別「しおり」在館者数 (2012年4月~7月)

月	平日	土曜	日曜	合計
4月	1,200	800	500	2,500
5月	1,500	1,000	600	3,100
6月	1,800	1,200	700	3,700
7月	1,600	1,100	600	3,300
合計	6,100	4,100	2,400	12,600

8

【スライド③-9】

3. 利用状況 (2)

2) 「しおり」開設後の学生の变化 (図書館スタッフより)

- ◆ 周囲の様子が感じられる環境による变化
 - ・他のグループの様子に刺激を受け活動が活発に
 - ・多目的スタジオでの講習も以前より集中力、緊張感が
 - ・講習会の宣伝効果も
- ◆ ラーニング・アドバイザーへの質問・相談内容の変化
 - ・図書館利用法、資料検索方法、レポート作成方法などに加えて、プレゼンテーションの資料作成方法・発表手法についての相談も

9

【スライド③-10】

4. 今後に向けて

- ◆ 施設整備だけで終わらない
 - ・大学の施設、スタッフ、サービスをいかに学生に利用してもらうか
 - ・利用拡大、活性化に向けた取り組みを継続
- ◆ 学習支援のスペースは図書館だけではない
 - ・キャンパス内各所のオープンスペース、アメニティスペースの活用
 - ・キャンパス全体で検討を
- ◆ 新座キャンパスならではの学習支援を
 - ・この規模だからできること
 - ・部署間、教職員間の連携が取りやすいキャンパスであることを強みに
 - ・学生の声を聴く → 新座学習環境アンケート (2012年9月～10月実施)

10



明治大学における 学習支援室の取組み

明治大学文学部教授、副教務部長、学習支援推進委員会副委員長
山田 朗氏

○家城 では、引き続き事例報告の2番目でございます。「明治大学における学習支援室の取組み」ということで、明治大学文学部教授でいらっしゃいます山田朗先生にご講演をいただきます。

山田先生は、ご専門は日本近代史、日本現代史ということでございますけれども、現在、副教務部長ということで、明治大学の教学運営に携わっておられます。

本日は、学習支援室の運営を明治大学で担っておられます推進委員会の副委員長ということでもありますので、学習支援室のお話をさせていただきます。

実は、我々のセンターも学習支援ということに随分前から興味がありまして、数年前にいろいろな大学を訪問して、学習支援室を調べたんでございますけれども、その中でも明治大学はかなり前から学習支援室に取り組んでおられて、かなりの経験をお持ちということで、今日はその経験をもとにお話をいただければと思います。

よろしく願いいたします。

1. 明治大学のキャンパスと学部

明治大学の山田です。今、大変スマートな、洗練された立教大学の事例報告の後に、非常に明治らしいと言いましょか、洗練とスマートの逆のパターンをお話ししなければいけません。試行錯誤と言いましょか、悩みながらやっているというのが私どもの実情でございます。

明治大学は、現在、3キャンパスがございます【スライド④-2】。駿河台キャンパスと和泉キャンパス、これが文系学部です。理系学部は川崎に生田キャンパ

スがございます。それぞれの規模が非常に大きいんですね。文系の和泉キャンパスは、学生が1万2千人ぐらいおります。法、商、政経、文、経営、情報コミュニケーション学部の1、2年生。国際日本学部は1年生から4年生までこの和泉キャンパスにいます【スライド④-3】。

同じ学部で2つのキャンパスに分かれるということは、メリット、デメリット両方ございます。つまり、3、4年生になると駿河台に行くわけですね。駿河台で1万1千人ぐらいの文系学生がいるわけですが、学生の学びというのが1年と2年、3年と4年というふうに分断されてしまう。これはどちらかというデメリットのほうが大きいですね。メリットもないわけではなくて、何か駿河台に行くと偉くなったような錯覚、自分も何か立派になったのかなという思いが湧いてくるということはあるんですけども。逆に、駿河台にいる3、4年生が1、2年生での単位を落として和泉に行かざるを得ないようなことがあると、これは学生が「和泉返し」なんて言うんですけども、大変な屈辱感を味わうということがあります。

生田キャンパスは理系で、1年から4年まですべて同じところで学んでおります。理工学部と農学部があります。それから、2013年4月、中野キャンパスがJR中野駅前にできまして、新しくできる総合数理学部と、和泉の国際日本学部がそちらに入ります。

2. 明治大学における主な学習支援活動

明治大学における主な学習支援活動をご説明します。いろいろなことをやっていて、美馬先生のお話にもありましたように、「分散していろいろやっている、みんな倒れてしまう」という典型的な事例ではないかと思えます【スライド④-4】。明治大学の場合、いろいろな入学形態がありまして、スポーツ推薦などで入ってくるような学生も結構いるわけですね。そういった学生を対象とした入学前教育というのは、かなり前からやっています。スポーツだとか、あるいは附属高校とか、あるいは指定校とか、かなり早い時点で入学が決まってしまう学生さんがいます。当然のことながらモチベーションが低下しまして、大学に入学したころには、もう「退化」しているという場合もあるものですから、それを何とか引っ張り上げようというのが、この入学前教育です。特に英語とか数学とか、通常は

受験勉強の中で、嫌々ではあるけれども、実力を伸ばしていく科目がやっぱり非常にだめなんですよね。

一般入学者も含めまして、英語とか理系科目、一定の学力水準がないとだめだという科目は補習授業をやらざるを得ないというのが現状です。

それから、スポーツ特別入試などで入ってくる学生には、入学後の授業も特設授業を設けないと、やはり落ちこぼれてしまうという現状があるんですね。

これからお話しいたしますのが、学習支援室での学習指導で、これは全学部の全学生を対象にしたものです。

それから、これらの学習支援活動とは別に、障がいを持った学生さんに対するサポートもやっております。

3. 学習支援室設置の背景

一理系キャンパスから出発し文系キャンパスへも波及

これから学習支援室という悪戦苦闘の場の話をしていただきます。そもそも学習支援活動が始まりましたのは、理系キャンパスでこの問題が深刻化してきたからです【スライド④-5】。2002年に農学部で学習支援活動が始まりました。学習支援室というのを作ったのです。といいますのは、やはり学力低下の問題が



ありまして、特に理数系科目で学力格差が非常に目立つようになった。授業が円滑にできないという教員からの訴えが強まってきたわけです。これを何とか解決しようということで、学習支援室をつくりました。2004年に理工学部も同じようなものをつくりました。そして、それらの経験に学んで、文系でも和泉、駿河台に学習支援室が2005年という段階でようやくできました。

全学生を対象とした学習支援の前提といたしまして、カリキュラムも全学的に変えていかなければいけません【スライド④-6】。しかし、明治大学はよく言えば伝統ある大学なんですけれども、悪く言えば、なかなか新しいことに踏み出せないところがある。明治大学の特徴は「1周遅れのトップ」などとよく言われます。自ら切り開いてトップに進めないのです。何か思いついてもなかなか踏み切れない。

しかしながら、1年生の導入教育というのは、やはり全学的にカリキュラムをきちんと見直していかなければだめだというかなり切羽詰まった事情がありまして、導入教育を目的とした授業科目を設けるようになりました。例えば、私が所属している文学部では、基礎演習（ゼミ）という科目を全専攻で設けて、先ほどお話がありましたように、学ぶとはどういうことなのかということ、それから、最近はやはりネットを使ってコピー&ペーストで、即席でレポートをつくってしまう学生が多いわけなんですけれども、どうしてそれがいけないのか、そういったことから教えています。高校生までは、書いてあるものを写してそれがいけないという感覚がないのです。参考書に書いてあることを写して何が悪いんだという感覚ですから。「いや、それがそもそも問題なのだ」というところから、説かなければいけないのではないかとということで、そういう科目を設置しています。

そして、1、2年生で特に学生にとって難関となっている科目がいくつかあるんですね。少し専門性を持った科目になりますと、関心のある学生は当然自分でどんどん勉強していくのですが、やっぱり暗記中心の学習のパターンが変えられない学生にとっては、ここで大きくつまづいてしまいます。全学的に（あるいは学部内で）科目ごとのGPAを見てみると、非常に低い科目というのが出てきます。それを調査して、その科目ごとに手当ができないかということで、助手やTAが個別に相談に乗るという学習支援を始めました。

4. 活動内容・運営体制

1) 職員・大学院生 TA 等が常駐

この科目ごとの学習支援の取組みというのは、理系のキャンパスでは、理工学部と農学部がそれぞれ学習支援室を持っておりまして、そこにその部屋を管理する職員の方と、それから理工学部のTA（大学院生）に詰めてもらうという形で進めています。和泉でも同じですね【スライド④-7】。

理系ですと、大学院生の数がそれなりにいますから、わりとこのシステムはやりやすいのですが、文系は院生が偏しているんですね。大学院生が多い分野とまばらな分野とがあるものですから、TAの確保がなかなか難しいところがあります。

2) 理系では学科ごと、またはつまずきやすい科目ごとに支援

例えば、理工学部は次のように時間割をつくりまして、例えば、「機械情報」というのは「機械情報工学科」という理工学部の学科のことで、この学科の学生はこの時間帯（月曜1限）に、勉強の相談がある人は学習支援室に来てくださいという割り振りをしています【スライド④-8】。月曜2限は、電気電子生命科学科とか、機械工学科の学生に来てもらう。学科ごとに時間を割り振って来てもらう。もちろん、このように割り振っていても、別の学科の人が来たから追い返すということはないんですけども、ある程度、専門性を考慮して、学習支援の時間割を組んでいます。

それから、学科とは別に、やはりつまずきやすいところ、それからサポートが必要な数学、物理、化学というところは授業のサポートをしていく必要があります。これは1限から3限まで、あるいは4限から6限までに置かれた曜日もあります【スライド④-9】。ですから、これは結構な人数のTAを張り付けなければいけないということになっています。ですが、理工学部は最も大学院生の数が多くて、実際、だいたい学年の定員の半分以上は大学院に進学しますので、そういう分厚い大学院生層に支えられてこういう時間割のやり方ができるということですね。

こんなふうに、あまりいい部屋ではないのですが、グループで教える場合もありますし、マンツーマンでやるというやり方もとっております【スライド

④-10】。

農学部も同じように、基本的には学科単位で学習支援をやっています。例えば、月曜のお昼休みには食料環境政策学科、あるいは生命科学科、こういう学生たちが来て下さいということをアナウンスしております【スライド④-11】。

農学部は理系なんですけれども、食料環境政策学科（旧農業経済学科）という文系学科が混ざっておりまして、ミクロ経済学などでつまづく人がかなり多い。学生にとっては、ここで単位を落として卒業できなくなるという、非常に恐ろしい科目があるのです。これは手当をしないとイケないだろうということです。GPAを見れば、もう一目瞭然です。この単位を落として留年というようなことが目に見えてわかりますので、その手当をしていくというやり方をとっております。

3) 文系では必要かつ可能な科目ごとに支援

理工と農では、ある意味で人海戦術ではあるのですが、システムを組んで学習支援をやっています。それに比べれば雑然としておりますのは、文系の和泉の学習支援室です【スライド④-12、④-13】。この時間割をご覧になると、これは一体何なんだと、思われるかもしれません。単なる科目を羅列した時間割かと思われるかもしれませんが、これも一応、学生が落としやすい科目で、それにTAがいる分野を選んで、時間割を組んでいるわけですが、実は、学生



にとっては必要だけれども、TAが確保できなくて開けないという場合もあるのですね。これは一番大きな欠点です。こういうふうに科目ごとにやりますと、どうしてもそういう穴ができてしまうのですね。さりとて、例えば、学科ごとに理系ののようにやればいいのかというと、ここでもやはり大学院生の偏在がありますので、また穴ができてしまう。なかなか文系は難しいですね。

しかし、難しくても何もやらないよりはいいだろうということで、だいたい学生が大きく失敗する科目というのは、やはり少し専門的になってきたときに、それに興味を持ってついていけるか、あるいは、ついていけないかという分かれ道になる科目が幾つかございます。例えば、ちょうど私の専門の領域もありますけれども、歴史学なんかでも、普通に本を読んでいる時はいいのですけれども、やっぱり原資料を読解するなんていう作業になってきますと、それに面白くてのめり込んでいく学生と、そこでついていけなくなってしまう学生とが分かれてくるんですね。ですから、原資料を読むというような授業には必ずこのTAを配置するようにしています【スライド④-12】。幸いここは大学院生も比較的いる分野です。TAを充ててサポートしていくというやり方をとれるのです。

あとは、語学関係は、どうしても必要ですね。それから、語学を使った授業をやっている、外国の歴史などを専門にする授業というのは、サポートしていかないとなかなか難しいことがございます【スライド④-13】。

5. 利用状況

1) コンスタントな利用がある理系

学生の利用状況は、理工学部や農学部はかなり利用者もコンスタントにあります。ただ、2011年4月の利用者ゼロというのは、東日本大震災の影響で、全学的に1カ月間開講時期を延ばしたためにゼロなんですけれども、開講すれば、現実問題として、確かに多くの利用者がある【スライド④-14】。しかし、理工学部は、1学年の入学定員は1,000人という非常に大きな学部です。主に1、2年生が利用するにしても、それだけで2千人ぐらいの学生がいるわけですから、年間通じてこれぐらいの学生の利用率というのは、まだそれほど高いとは言えないだろうと思います。つまり、これは来る人は来るけれども、来ない人もかなりいる。来る人はリピーターで、抵抗感がないので何度も来るんですけれども、そ

ういう人とこない人に二極分解してしまっている。本当はそのなかなか来られない人に足を向けさせる努力が重要なのです。先ほどのお話（アメリカの事例）で、チューターのほうから出向くというお話がありました。それを文字どおり実現することはできないかもしれませんが、やはり学生がもっと活用しやすい環境づくりというのが非常に重要です。

農学部は、学生数に比して比較的利用の度合いが高いです【スライド④-15】。

2) 利用率が低い文系一ロケーションの重要性

問題は和泉です。文系は、学生の人数の割には利用率があまり高くないんですね【スライド④-16】。これは、1つには、この和泉の学習支援室の環境が非常によくないといいたいでしょうか、行きづらい場所にあるのです。どうもこういうものは、どこか余っているスペースに、この前まで倉庫だったようなところに、どこかにあればいいんだらうという発想になりがちです。つまり、こういうものをもっと主役にして押し出さないとだめなんだというふうに、なかなかないのです。

実は、明治大学も少しはやろうとしています。今年新しい図書館が和泉にできまして、この和泉の図書館の中に、先ほどご紹介のあった立教大学よりは貧弱ですけれども、そういうグループ学習の場とか、学習支援の場を、確保しております。学習支援室も、実は一部の学習支援業務を図書館の中でおこなうということまではこぎ着けております。それから、新しくできる中野キャンパスにおいても、やはり図書館の中に学習支援スペースを確保することを考えております。

学生にとっていかにも行きづらい場所で、「あそこに行く人は何か特別な人たちで、落ちこぼれだ」みたいな、そういうイメージを持たれるような暗い場所だとやはりいけないわけですね。誰でもが利用できる明るい場所にならないといけません。これは明治大学の、どちらかというと失敗の事例としてぜひ参考にしていただきたいと思います。やっぱり学習支援のロケーションというのは非常に大事ですね。

3) 利用は低学年次が多い

理工学部の事例で見ますと、やはり利用者は圧倒的に1、2年生です【スライド④-17】。3、4年生になりますと、自分の所属のゼミの中での、ゼミ単

位での先輩と後輩の学習支援関係というのができてくるんですね。ですから、それはそのコミュニティに任せればだいたい済むことなんですけど、そのコミュニティがよくできていない1、2年生は、やはりしっかりサポートをしなくてははいけない。

実はこの理工学部の生田キャンパスは、1年から4年までいるキャンパスなので、そういうゼミ単位といいましょうか、研究室単位の一定のコミュニティができますのでいいんですけど、問題は文系なんですね。やっぱり1、2年生と3、4年生が分断されていますから、1、2年生は1、2年生だけで固まってしまう。3、4年生は3、4年生だけで固まってしまう。3、4年生になりますと、やっぱりゼミに所属することになりますので、これはある程度いいんです。ところが、そうでない1、2年生をサポートしなければいけません。さっきもお話ししましたように、1、2年生が所属するゼミというのをカリキュラム上つくって、それで何とかカバーしようとはしているんですけども、やはり1年生と4年生では随分違うわけで、できればそういう先輩後輩関係をうまく1つのコミュニティにして、学習支援に生かしていけないかと考えているところです。

6. 成果と課題

理工学部、農学部の学習支援活動はかなりの成果を上げております【スライド④-18】。特に理工学部は学生からの質問内容や回答を、ネットワークを介して公開して、だいたいつまづくところとか、質問というのはかなり似通ったところが多いので、それで随分役立つと聞いています。それから、農学部ですが、比較的少ない人数に対して割と多いスタッフで対応していますので、マンツーマンでかなり理想的な学習支援ができていると思います。

うまくいっていないのは、やはり文系、和泉でありまして、ある程度マンツーマンの学習支援によって、語学や資料読解など、学習のつまずきが今まで見られた科目で、一定の成果は出ておりますけれども、これはまだまだです【スライド④-19】。先ほども言いましたように、必要な科目にちゃんとTAが配置されていないという状況で、学生にとっては、なぜここに支援スタッフがないんだという不満があります。

それから、図書館での学習支援ですね、これはなんとか実現できるように現在

進めております。また、できれば文系でも理工や農学部の学習支援室のようなシステムの整備が必要なんですけれども、これがなかなかうまくいっていないということで、いろいろと課題がございます。

また学習支援室のロケーションが非常に大事で、明るく入りやすいということがやはり大事であるということを感じているところであります【スライド④-20】。将来的に図書館の中に移っていくということは、かなり効果があるのだろうと思っております。

さらには、教員や、あるいは図書館などとの連携。特に教員ですね。教員がこの実態をきちんと把握していないと、いくらこの支援システムをつくっていても、あまりうまくいかないわけです。

それから、学生のニーズのくみ上げというのは、授業アンケートなどをとりながら、かなりくみ上げをやっていて、やはりこういう科目に対してサポートは必要だなとか、あるいは、旧来からの概論系の授業というのは、うまく機能していないなというようなことは、すでに私たちがつかんでいるところでございます。

それから、何と言いましても学習支援スタッフの増強ということが重要です。しかし、そうは言っても、これは簡単に人数だけをそろえるというわけにもいきませんので、助手、TAの一定の層がないと成立しないということと、それから、上級生、3、4年生を使った支援ということもやっぱり必要だと思います。これ



は3、4年生にとってもいいんですね。教えるということになると、今までと違ったモチベーションで勉強できるということがございます。

いろいろと、うまくいっていないところも含めまして、正直にお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

○家城 山田先生、ありがとうございました。

【スライド④-3】

明治大学の概要



和泉キャンパス 学生数 12,000人
文系学部1・2年生+国際日本学部
(法・商・政経・文・経営・情コミ)



駿河台キャンパス 学生数 11,000人
文系学部3・4年生



生田キャンパス
学生数 7,000人
農学部+理工学部

中野キャンパス 2013年～
総合数理学部+国際日本学部

【スライド④-4】

明治大学におけるおもな学習支援

種 類	対 象 者	内 容
入学前教育	特別入試入学者	英語・数学などの補習、レポート添削
補習講義 (短期集中)	一般入試入学者	英語+理系科目の補習
語学特設授業	スポーツ学生	特設クラスによる語学授業
学習支援室での学習指導	全学生	授業科目ごとの個別学習指導
障害学生学習支援	障害をもつ学生	ノートテイキングなど

1
01778354

【スライド④-5】

学習支援室設置の背景
(大学全体の学習環境整備における位置づけ)

(1) さまざまな入試形態で入学する学生（入学時の学力には格差がある）へのきめ細かいサポートの必要性
とりわけ理数系科目での学力格差問題がきっかけ
2002年：農学部で学習支援始まる→学習支援室に
2004年：理工学部で学習支援室（学習支援センター）開設
2005年：和泉・駿河台で学習支援室開設

2017/07/31

【スライド④-6】

学習支援室設置の背景
(大学全体の学習環境整備における位置づけ)

(2) 全学生を対象とした学習支援に
・導入教育を目的とした授業科目の設置
・1・2年生の特定科目（専門科目）へのサポート
→ GPAにもとづく追跡調査
→ 助手・TAによる個別相談・学習指導

(3) 留学生・障害学生を対象とした学習支援の充実へ

2017/07/31

【スライド④-7】

学習支援室の活動内容・運営体制

キャンパス	場所	担当者	支援時間
生田	理工学部 学習支援室	職員 理工学部 T A	8 : 50~ 17 : 50
	農学部 学習支援室 フォローアップ室	職員 農学部 T A	12 : 00~ 18 : 00
和泉	和泉学習支援室	職員 文系学部 助手・T A	9 : 00~ 19 : 00

2017/02/01

【スライド④-8】

学習支援室の活動内容・運営体制 (理工・2011年度前期・1～3時限)

時限	月	火	水	木	金
1	機械情報	基礎数学 基礎物理	基礎数学 基礎物理	基礎数学 基礎物理	機械工学 基礎数学 基礎化学
2	電気電子 機械工学 基礎数学 基礎物理 基礎化学	電気電子 機械情報 情報科学 基礎数学	機械工学 建築 基礎数学 基礎物理 基礎化学	電気電子 機械工学 機械情報 建築 基礎数学 基礎物理	機械工学 情報科学 基礎数学 基礎物理 基礎化学
3	電気電子 基礎数学 基礎物理	基礎数学 基礎物理 基礎化学	基礎数学	基礎数学 基礎物理	基礎数学 基礎化学

※下線部は学科名

2017/02/01

【スライド④-9】

学習支援室の活動内容・運営体制 (理工・2011年度前期・4～6時限)

時限	月	火	水	木	金
4	基礎数学 基礎物理	電気電子 基礎数学 基礎物理 基礎化学 英語・文章表現	電気電子 情報科学 基礎数学	基礎数学 基礎物理	建築 基礎数学 基礎物理
5	情報科学 基礎数学	電気電子 基礎数学 基礎物理 基礎化学 英語・文章表現	基礎数学 基礎化学	基礎数学 英語・文章表現	機械情報 建築 基礎数学 基礎物理 基礎化学
6	※下線部は学科名			基礎数学 基礎物理 基礎化学 英語・文章表現	

【スライド④-10】

学習支援室の様子




↑ 理工学部学習支援室

農学部学習支援室 →



10
2012/12/21

【スライド④-11】

学習支援室の活動内容・運営体制 (農・2011年度)

時限	月	火	水	木	金
昼	食料環境 生命科学	農芸化学	食料環境	食料環境	食料環境 農芸化学
3	生命科学	農芸化学		食料環境 語学	食料環境 ミクロ経済学
4	生命科学	農芸化学	食料環境 ミクロ経済学	食料環境 ミクロ経済学	食料環境 語学
5	生命科学	農芸化学	食料環境 ミクロ経済学	食料環境 語学	

※下線部は学科名

0017437/11

【スライド④-12】

学習支援室の活動内容・運営体制 (和泉・2011年度前期・月曜日の例①)

支援科目	時間
貿易総論	10:00~14:00/14:00~17:00
経営学総論・中国語・英語	10:00~12:00
経営学総論・中国語	10:00~12:00/15:00~19:00
経営学総論	12:00~14:00/15:00~17:00
金融総論	13:00~19:00
近代経済学・理論経済学	13:00~17:00
発表資料作成補助(考古学)	10:00~13:00
英語(言語学)	11:00~13:00/13:00~15:00
日本近現代史・資料講読補助	9:00~11:00/12:00~18:00
日本古代史・資料講読補助	10:00~12:00
日本中世史・資料講読補助	13:00~17:00

0017433/11

【スライド④-13】

学習支援室の活動内容・運営体制 (和泉・2011年度前期・月曜日の例②)

支援科目	時間
ドイツ語読解・留学相談	10:30~16:30
フランス語 発音・文法	10:30~14:30/9:00~15:00
英文読解・イギリス史	12:00~14:00
簿記論	9:00~11:00/13:00~15:00/ 17:00~19:00
経営学	11:00~13:00/15:00~17:00
西洋哲学史・社会思想史・レポート指導	12:30~18:30
西洋史・英語	13:00~19:00

0017/02/31

【スライド④-14】

学生の利用状況 (理工学部・2011年度の月別利用者数)

年度	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
2006	212	217	249	241	24	95	103	52	108	1301
2007	131	291	354	424	26	199	103	74	171	1773
2008	113	266	272	381	14	171	115	53	164	1549
2009	114	251	273	470	15	111	130	92	199	1655
2010	116	214	246	429	21	133	101	117	220	1597
2011	0	118	216	329	15	69	82	46	155	1030

※ 2・3月は閉室。

0017/02/31

【スライド④-15】

学生の利用状況 (農学部・2011年度の月別利用者数)

年度	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
2006	35	158	145	176	18	147	71	72	158	980
2007	124	160	166	330	29	175	160	126	224	1494
2008	120	158	168	242	16	103	117	90	197	1211
2009	200	112	145	180	23	126	143	100	84	1113
2010	68	52	49	121	23	137	59	44	93	646
2011		141	155	138	31	166	46	52	81	810

※ 2011年4月は震災のため閉室。2・3月は閉室。

2017/12/31

【スライド④-16】

学生の利用状況 (和泉・2011年度の月別利用者数)

年度	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
2006	37	130	122	80	6	42	46	44	10	517
2007	49	95	204	250	39	107	127	126	102	1102
2008	39	106	257	221	9	68	101	63	90	954
2009	30	113	171	153	13	104	110	111	79	884
2010	62	151	161	196	34	100	73	104	65	946
2011		91	125	124	19	106	123	98	70	756

※ 2011年4月は震災のため閉室。2・3月は閉室。

2017/12/31

【スライド④-17】

学生の利用状況

(理工学部・2011年度の学年別利用者数)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
1年生	0	52	106	159	3	21	33	15	68	457
2年生	0	45	54	87	9	27	30	15	58	325
3年生	0	15	44	66	2	15	15	15	18	190
4年生	0	6	12	17	1	6	4	1	11	58
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	118	216	329	15	69	82	46	155	1030

※ 2・3月は閉室。

17 2017/02/21

【スライド④-18】

学習支援室の成果

理工学部学習支援室

- 当初、特別入試入学者の利用が中心だったが、現在では一般学生の利用率も高まっている。
- 支援内容も理系基礎科目から学科専門科目へと広がり、学生からの質問内容及び回答はネットワークを介して公開され、学習効果の向上を図っている。

農学部学習支援室

- スタッフが常駐する「学習相談室」とは別に、多目的に使用される「フォローアップ室」を設置し、相談前後の学習にあてられている。

18 2017/02/21

【スライド④-19】

学習支援室の成果

和泉学習支援室

- マンツーマンによる学習支援の結果、語学・史料読解などで、学習のつまづきが少なくなる効果があらわれている。
- 図書館での学習支援（情報検索指導など）とあわせて、助手・T Aのアドバイスが学生にとっては役立っている。
- 理工・農学部のようなシステムの整備が必要（学科ごとの時間割など）

0017142/11

【スライド④-20】

今後の課題

- 学習支援室自体のPRの必要性
 - 「落ちこぼれ」感、抵抗感の払拭
- 学習支援室のロケーションの重要性
 - 和泉学習支援室、地下に移転後、利用者減少
- 授業担当者（教員）、図書館などとの連携
 - 授業と学習支援スタッフとの役割分担
- 学生のニーズの汲み上げ
- 学習支援スタッフの増強
 - 助手・T A・上級学生のモチベーション向上にもつながる。

0017142/11

○**家城** 引き続き今日ご登壇頂いた皆様に、壇上にご集まっていただきまして、質疑とディスカッションに移りたいと思います。ちょっと時間が限られておりますので、最初に今日後半で行いました2つの事例報告に関して質問をお受けします。明治大学と立教大学という昔からあるやや大規模な大学ですね。山田先生のお話にもありましたが、大きな大学でどういうふうな取組みができるかということに対する2つの報告になっていたかと思います。それらに関する質疑を少し受け付けて、その後で今日のシンポジウム全体にかかる話、今後の学習支援、あるいは学習環境に関してどういうことができるだろうかということディスカッションする時間がとれればと思っています。

最初に、後半の事例報告に関して、どなたかご質問ございますでしょうか。

質問1

○**学外からのご来場者** 中央大学4年の学部生の***と申します。新座キャンパスの図書館についての質問なんですけれども、先ほどウェブによるアンケートには結構ポジティブな意見が見られたという話がありました。もしよろしければ、そのポジティブな回答以外で、学生側に何かリクエストであったりだとか、もっ



とこうしてほしいといった意見が、ありましたら教えてください。よろしくお願いいたします。

○**田村** ちょうどアンケートの結果、素のデータが上がってきたところで、まだ詳しい分析をしていないのですが、例えば、「パソコンの貸し出しの台数を増やしてほしい」ですとか、あとは機材の関係でこういうものが欲しいというような意見などがありました。

池袋キャンパスに新しい大きな図書館ができたところですが、まだそれを知らない時期にアンケートをとったこともあって、全般的に新座キャンパスの学習環境はとてもよいという意見が多かったです。ちょうど会場に図書館の職員も来ているので、何か補足があればお話しください。

○**図書館職員** アンケートについてですけれども、学習環境としてはおおむね好評な生の声が自由記述のところでも出ておりました。レポート作成などに活用できるであるとか、落ち着いてといいますか、学習しやすいところであるというような意見が出ておりますので、この段階ではおおむね好評です。

あるとするならば、やはりPCの貸出の問題です。池袋のほうでは、図書館の中にメディアセンターというところの学生スタッフですけれども、そこが入り込みましてPCの貸出等行っておりますので、特に図書館の中という意識なく、キャンパスの中のどこでもノートPCが使えるという状態になっています。一方、新座のほうは二本立てで、新座のメディアセンターが貸し出すPCについてはキャンパス内どこでも使えるんですけれども、「しおり」では図書館が持っているPCを貸し出すというスタイルなので、図書館の中でしか使えないというところがあります。その辺のところ池袋と新座では環境が異なるので、学生から、「場所を意識することなく、ノートPCはキャンパスのいろいろなところで使いたい」という声があがっております。

○**家城** ありがとうございます。ほかに質問は。

質問2

○**疋田** 経済学部で疋田でございます。新座キャンパスでの最初の設計というか、

企画のところなんですけれども、ここに学生からのアンケートではなくて、学生そのものを参加させる。あるいは、学内のインターンシップ的な機能ですね。大学の中の一層の意思決定に学生を参加させていくということは考えなかったのでしょうか。中教審も取り上げていますが、海外ではたとえばEUのレベルで学生委員会が大学の仕組みをつくるのに参加していると。そういう風に海外の大学では意思決定のレベルでの学生の参加というのが非常に多いと思うんですね。日本だけは非常に少ないので、そういう風に学生をまだお客さん扱っているようなところがあるのかなと思います。そういったことにそろそろ踏み込んでいって、外のことを知らせるとか、社会感覚を身につけさせるとか、そういうものも重要なファクターで、コミュニティが実は外に広がっているということも理解させる必要があるのではないかと思います。そういう企画がなかったのかということ質問としてはお伺いします。

○田村 学生の声を直接聞きたいという意見はもちろんあったのですが、今回の検討スケジュールでは時間的な問題もありまして、実際そこまでには至らなかったというのが実情です。学部の先生方がメンバーに入っておりましてので、ゼミ生の話とか、学生たちの様子ということで、間接的な情報はありましたが、そ



経済学部 疋田 康行 教授

ここに参画して意思決定のレベルにまで学生を参加させるということについては、ちょっと今回は至らなかったということです。

○村上 とても重要なことだと思います。ですけれども、例えば、新座でそういうものをやろうとするとときに、学部や研究科によって学生の自治会の設置にバラツキがあるという問題があります。観光学研究科には、院生会がありますが、観光学部にはございません。

我々は院生室の備品の整備については学生の意見を聞いています。大きな補助金でもらった設備や備品を学生に譲渡するということにも、彼らの意見を聞きます。

しかし残念ながら、それが出来るのも観光学研究科だけです。多分、そのような組織的機能がないと、ラーニングコモンズなども実際にどうやって使われるのかという学生の評価がうまく出てこない可能性があります。

今、ご指摘のことを聞いて私はそう思いました。

○美馬 つくる段階でなくても、今後可能性はかなりあるのではないかと思うんですね。新座とこの池袋キャンパスとの違いは私、よくわかりませんが、今日見学させていただいて、ラーニングコモンズというのができて、それからラーニングアドバイザーという仕組みができてきたと。そうすると、ティーチングアシスタントなり、そういうラーニングアドバイザーのコミュニティができるような仕掛けをこちらが用意していくことが重要だと思います。そもそも自分たち自身がどういうスキルを持ってやるべきなのかとか、どういう問題を抱えている学生が多くて、それに対して自分たちはどう対処していくべきなのかとか。実際に学生に対応していく学生たちの、そういったコミュニティをいかにつくっていくかということで、それがライブラリーとかコモンズの運用にかなり反映されてくるのではないかと思います。

○家城 ありがとうございます。前半の美馬先生のところでも、今の質問にもございましたが、コミュニティをつくるという考え方が今後非常に大事なものになるかと思っています。その点に関しまして、各大学でありますとか、立教大学でもそうですけれども、どういう形で進めていけばいいか。あるいは、どういうふうにしたいのか。いろいろな問題を抱えていると。そういうことに関して何かご質問、

ご意見等ありましたら。

質問3

○**学外からのご来場者** 戸板女子短期大学専任講師の山本と申します。立教大学の文学研究科の大学院を修了して、2年前に着任したばかりで、現在、学習空間ですとか、あるいはピアラーニングですとか、そういったことにいろいろチャレンジしては失敗しているところで、このシンポジウムがあると知って参加させていただきました。

今私が働いている短大では、学習意欲がそんなに高くない学生が多いということもありまして、例えば、学習空間とか、学習支援のシステムを与えていても、なかなか活用してもらえないというようなことがありました。明治大学、立教大学の新座キャンパスのケースでは、教員が介在しすぎるのもちょっとあれなんですけれども、カリキュラム上とか、あるいは授業の組み立てで何らかの工夫をするとか、教員の意識を変えていくといった点で共通していて、重要なお話だったと思います。例えば宿題であるとか、課題であるとか、社会性とか共同性のあるような課題みたいなものを授業の中に組み込んでいく。そういうちょっとしたアイデアを幾つか、新米教員ですので、教えていただけると助かります。



○村上 それは社会との関係ですか。それとも、それぞれの演習とか課題とかの関係ですか。

○学外からのご来場者 例えば、1つの演習を例にとりて教えていただけると。

○村上 わかりました。観光学部ですので、幾つかのタイプの授業があります。例えば、フィールドワークみたいな授業ですと、そのフィールドワークの最初の企画の段階から学生がやっていますので、その企画をどうやってしていくのかというところを教員が説明していきます。だいたい複数学年が演習の中にいますので、その複数学年が集まって作業していきますので、議論や作業の仕方が継承されていきます。昔は教員の研究室でしていた作業が、ラーニングコモンズという新しい空間ができたので、そこでやっていくという形です。

非常に重要なことは、その活動をほかの学生が見るということです。例えば、複数の演習で似たような課題が出ているとき、演習の時間をコマ上、一緒の時間に配置しておく、学生がサブゼミをする時間がほぼ一緒になります。そうすると、ほかのところをやっていることを見ながら自動的に、あそこはあれをやっているから真似しようということで自動的にスキルが相互作用的に向上することに



なります。

そこをいかにして学科とか学部が支援していくのかというところですが、我々はまだ十分に開発しきれていないと思っています。ラーニングアドバイザーにそれができるかということ、形式的にできるかもしれないけれども、キュレーターサービスという機能が無いと、創造的に先に進んでいかないと考えられます。研究とかビジネスのモデルをつくっていくときに、どうやったらより「創造性」の高いステップに上げられるのか。そこのところが重要で、ラーニングコモンズにそういうようなサービスがあれば、より良いのではないかと考えています。

○美馬 今のご質問に対して私は2つ思ったことがあります。1つは、大学の教員というのは、自分が教えるということについての教育を受けていないですよ。そのときにやはり教育学というのは皆さん、大学の教員の方はあまり信じていないかもしれないですけども、それなりに研究がなされていて、そのときに参考になるものとして、インストラクショナルデザインという分野があります。IDと我々は言っていますけれども、どういうふうに授業を組み立てて、どういうふうにもっていくかというのは、さまざまな長い研究の歴史がありますので、日本語でもインストラクショナルデザインで引くといろいろ出てきます。ご自分の問題として多分、そういうものががんがん読み込めるはずですので、それをお勧めします。

もう1つは、もっと具体的な話として、うちの大学の場合は、新しく教員になられた方とか、若い方とか、企業からこられていて教育経験が全然ない方も、チーム・ティーチングの制度があるので、まずその中に入ってくるんですね。だから、自分でやらなくても、その中に入ってやっていくというのが、とてもいいFDになっているというのは、実際に経験した先生方からよく聞く声です。

それを今の質問者の方がご自身でできるかどうかというのはまた別の問題なんですけど、例えば、ほかの先生の授業を見に行く。それは制度としてなくても、ちょっと何かで親しくなったり、これはと思ったところを見に行ったり、同じような若い先生同士と一緒に授業をしませんかということをして話して、全然科目が違っても、お互いに両方の授業に出て行くということをやっていく。そうすると問題を共有できたり、新しいアイデアを得たりすることができます。そういうふうに自分から進んで同じような仲間を見つけてやっていくことによって、新たなものが見え

てくるような気がします。

○山田 学生の学びをどういうふうに活性化させていくかというのは、もちろん環境を整えるということは大事なことだと思うんですけども、ちょっと何らかのインセンティブを与えるというか、何か後押しすると、学生たちは意外なほど頑張ってしまうということがあるんですね。例えば、明治大学でやっているのは、オープンキャンパスの企画の一部をある程度、学生に丸投げしてしまうということなんです。自分の所属している学部をどういうふうに紹介しますかという企画を学生にやらせてしまうんですね。そうすると、それなりに、これはやはりいい加減にできないですよ。どういうことを学べるのか、なんていうことを結構一生懸命、今まであまり一生懸命じゃなかった人が突然、一生懸命やるようになったり。あるいは、プレゼンテーションの技術を競う[eプレゼンコンテスト]などを、大学がちょっと補助してやると、結構面白いのが集まってきたりするんです。

ですから、ちょっとした後押しで、学生たちは非常に活発に動くようになるということ。これは、実は今の若者気質なのかもしれないですけども、やっぱり自分だけではなかなか踏み出せないみたいなのところがあるんですけども、何かのちょっとしたきっかけがあると、思いのほか頑張るんですね。それでめり込むんです。ですから、そういう何か学生の意欲というものをほんのちょっと、あまり引っ張り回そうとしないで、ちょっとだけ何か後押しする仕組みというのを大学側でつくっていくというのも、結構効果があるのではないかなと思います。

○学外からのご来場者 どうもありがとうございました。

○家城 すみません。進行が悪くて、もう既に終了時間を過ぎているのですけども、もしありましたら、もう1つだけ質問ないしご意見をお受けして終わりにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

質問4

○寺崎 センターの顧問の寺崎と申します。美馬先生に伺いたかったんですけども、教員のほうのグループとか協働、これの具体的な様子を伺いたかったのですが、先ほどから随分話していただいたので、だいたいわかったような気がいたします。

す。1つ具体的に聞きますと、プロブレム・ベースド・ラーニング、PBLですね。そういうときに、何がプロブレムで、何のプロジェクトをするかという。そこから協働が始まるのでしょうか。それとも、途中からその辺の合意が形成されていくようになるのか。教員のチームというのはどうやってつくられるんですか。

○美馬 これは、語ると面白すぎて長くなりますが、手短に言います。まず、プロジェクト学習でテーマを教員同士が決めます。毎年継続していくテーマや、中身を微妙に変えながら継続していくものもあるし、新たに立ち上げるものもあります。プロジェクト学習全体を統括する教員のチームがあるんですね。彼らが毎年2月ごろに、全教員に来年度やりたいテーマを挙げてくださいと言います。そこで、目標と、当然ながらどういうプロブレムを扱って、それが今までやってきた授業とどう関係しているのか、どの辺まで持っていくのか、どういう力がつくのかといったことについて、シートがあるので、そこの中に書き込むんですね。誰と誰と、どういう教員でやります。企業や地域と連動するなど、学外関係者と関係する場合にはそれも書くんですね。その後、一応、それを教員の統括グループが審査します。落ちることはほとんどありませんが、これはちゃんと1年間の単位をあげるものになっているかどうかといった点について審査します。



立教学院調査役、大学教育開発・支援センター 顧問 寺崎 昌男

そのときに、教員は自分でチームメンバーを選ぶんですね。でも、必ずそれは違う分野の人が入るよという縛りがあります。では、仲良し教員だけがいつも同じになるかという、そうではなくて、1年やって、2年続けてやると、ちょっとあの人とやってみたいなとかいうので、お互いに引き合いが。要するに、小学校のとき、グループを自由につくりなさいというのと同じですね。

その後なんです。4月の中旬のある1日に、教員のプレゼン合戦の日があります。先ほどの写真がそうですね。そのチームをつくった教員が、いい学生を集めるために、学生に対してプレゼンをします。それを見て学生が第何希望かまで書くんですけども、採っていい人数が教員1人当たり何人までと決まっているので、いい学生を上から採れればプロジェクトは成功したようなものなので、教員同士がすごく張り合っていていいプレゼンをします。青田買い交渉も始まります。何でもいいんです。ところが、そこで学生に選ばなかったプロジェクトはどういうことになるかという、それはお取りつぶしになります。お取りつぶしになった教員はどうするかという、頭を下げてほかのグループに入らなければいけない。でもそこまでは実際はないです。みんな優しいから、そうなったところ、お取りつぶしになったところに、「先生、うちに来ない?」とみんな声をかけるようになっていきます。そういうふうにしてやっていくことによって、新しく大学に赴任した人を、あの人面白そうだからちょっと入れてみようとか、私などはデザイン系の先生と一緒にいたら自分も格好よくポスターをつくれるようになるかもしれないか思いながら入ったこともあります。やはり教員は負けるのは嫌ですからね。プレゼンをすごく頑張って、かなり飛び道具なども出してきたり。前年の学生がいい学生だったりすると、その学生たちに手伝ってもらって、こんなことができるようになりますとか、そういうことで協働と競争が始まります。

○寺崎 わかりました。どうも。

○家城 時間が過ぎておりますので、これでディスカッションを閉じたいと思いますが、もしもうお一方人いらっしゃいましたら、いらっしゃいますか。では、簡単をお願いします。

質問5

○**学外からのご来場者** すみません。三重中京大の清水と申します。今日のお話は、ラーニングコモンズをつくる、学習支援室をつくると。ただ、私がもう少し先生方にお伺いしたかったのは、本当はそれで先生が変わり、職員も変わり、学生も変わらなければいけない。というところで、さっきの和泉の話もありましたが、ああいう学習支援室の科目になってしまうと、私が教員だったら、「俺、やっぱり教え方が悪いんだな」と思うと思うんですけど、実際に大学コミュニティが小屋をつくったことによってどうやって変わるんだろうか。変わる仕組みってあるんですか。

○**山田** 和泉の場合、要するに、単位を落としそうな科目を選んで設置するのは、半分は教員の側の要求です。ですから、何か地獄の科目だと指定されて、気分を害する先生もいますけれども、どちらかというと、教員のほうから何とかしてくれ、という要望があります。これは割とうまくいく場合ですけれども、教員のほうも教え方を工夫しなければいけないとだんだん自覚していきますし、また、何が学生にとってつまずきの原因になっているか知ることもあります。学習支援室では、どういう相談を受けたのかということも全部、教員に戻しております。ですから、おおむねそういうことをやっていくとうまく回っていくのではないかと思います。

基本的にはその教員の同意を得ながら、科目の設定をしておりますので、今まであまり大きなトラブルはなかったと思います。

○**家城** ありがとうございます。では、これでディスカッションを閉じさせていただきますたいと思います。本日は遅くまで参加いただきまして、ありがとうございます。お手元に参加者アンケートがございますので、記入いただければと思います。

最後に、当センターの副センター長である小澤からご挨拶をさせていただきます。

閉会挨拶

○小澤 経済学部の小澤でございます。当センターの副センター長をさせていただいております。本日は「学びが高まる学習環境とは」というタイトルのシンポジウムを開催させていただきました。学びを高めるためにどんな学習環境を整備したらいいかということについて、皆さまにとって何か学びがございましたら、私たちとしては幸せでございます。

最後になりますが、お忙しい中、本シンポジウムにご登壇いただきました皆さまに、もう一度温かい拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本シンポジウムを終わらせていただきたいと思います。アンケートはぜひご記入いただきまして、最後、お帰りの際に提出していただけますと、大変ありがたいと存じます。どうもありがとうございました。



大学教育開発・支援センター 副センター長、経済学部 准教授 小澤 康裕

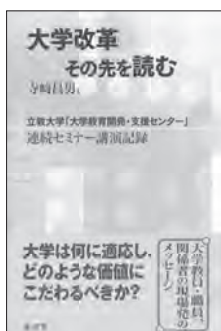
●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)

NO.15 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)

NO.16 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)
東信堂 ¥1,300

大学教育開発研究シリーズ NO.17
学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティ—

2013年2月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY